

---

# 人類の・・・・～僕のやり方～

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人類の・・・～僕のやり方～

### 【著者名】

Z8824C

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

彼の名前は村雨時雨。桜舞い散る世界に住んでいる夢見る高校生である。彼が目を覚ましたとき、彼の物語が始まる・・・はずである。

## 第一話・舞い散る桜の元で舞う待ち人（前書き）

（作者との約束）小説を読むときは暗いところで読まずに明るいと  
ここで読みましょう！

## 第一話：舞い散る桜の元で舞う待ち人

奴が来る

私の“能力”を奪い去った奴が来る

私をここに閉じ込めた男の息子が来る

この時を待っていた

私を閉じ込めた男の息子の実力、この私がその目で確かめる

……これまで、私はここで舞つていよう。桜が舞い散る、この場所で……

一、

僕の名前はむらさめじぐれ村雨時雨・・・桜吹雪が舞い散る世界に住んでいる。夢は“人類の敵”になることなのだが、それを実現させるために“悪の組織”を創立したいと思っている。“人類の敵”がどのようなものなのか、まだわからないが創立して考えればいいだろう。だが、今はそんなことより大変なことが起こった。

「……、どうだらう?」

目が覚めたら一つの港に倒れていた。周りには僕が所持しているバッグや旅行鞄が置かれている。別に記憶喪失にも何にもなっていないのだが、この状況はどうしたものだろうか?もしかして、悪の組織に僕が捕まつたのか?おいおい、冗談きついわ・・・

「あ～生徒の監さんは至急、島の中央にある学校に来てください」

港の近くでそんなことを言つてゐる一人の男性を発見した。ジャージ、胸元に笛・・・そして、角刈り・・・これは間違いないく「体育の先生」に違ひないだろ。これ以外、僕の頭の中での「体育の先生」というイメージはない。

「あの、すみません！」

「どうした？えっと、お前は・・・村雨だつたか？」

「はい、でも・・・ここはどこなんですか？」

「あ～なるほど、やっぱりこういう奴がいるんだな・・・また拉致か？」

やれやれといった様子でため息を吐くと笛を吹いた。

「はいは～い！何ですかあ？」

「村雨のお手伝いさん、事情を察していない人物だつたぞ。こいつを・・・」

遠くに見える学校を指差す。

「・・・学校につれてつてくれ。俺はまだ他の連中を誘導しないといけないからな」

そういうて僕の背中を思いつきり押して他にもいた人たちに指示を飛ばし始める。

「いたた・・・あの人、一体全体僕に何の恨みがあるんだ？」

「それはですね、こんなに可愛い私に案内をしてもらえるのをひがんでいるのでしょうか」

漆黒のスース姿の女の人はそういうてこいつと僕に微笑みかけてくる。

「・・・」

「ありや？反応薄いですね～私、そんなに可愛いないですか？やっぱり、メイド姿のほうがモテますかね？いえ、萌えますかね？」

「そんなことはどうでもいいので、この状況を僕に説明してくれませんか？」

「おつと、そうでしたね」

「ほんとせきをして彼女は真剣な顔をして僕のほうを見る。

「…………この度は『長決め選手権第一回戦』にご出場、おめでとおめでります。失礼ながら、村雨時雨様の日々の日常、実力などを見定めさせてもらいました結果、見事“水の一族”の代表選手として選ばれました」

そういうて頭を下げる女性。僕は首を傾げるばかりだ。

「え・・・そんなの聞いたことがないんだけど……」

「そうでしょう。実際のところは時期当主や、次点で能力が高いものたちがこの島に招かれます。二十歳以下の人たちが主にここには集められますね。村雨様は特例だと思われます。さて、他に、何か聞きたいことはありませんか？」

「…………あの、僕は今帰れないんですか？」

今度の英語の時間では和訳がある！僕、当てられてたんだよなあ。

「今は無理ですね。先ほど、乗られてきた船が完璧に沈んだようで。…………まあ、ここでの生活はそこまで苦労しないと思いますし、何がありましたら私に言つてください。あ、ちなみに私は村雨時雨様が島にいる間村雨様を個人的にお世話するお世話係です。名前は美奈といいます。よろしくお願ひしますね？」

「あ、はい・・・・」

荷物を持つてもらつたまま、僕と美奈さんは共に学校へと向かつたのだった。しかし、まあ、おかしいものがあるもんだなあ……

“一族”を束ねている“当主”になる予定だったのは僕の妹だ。実力だつて僕より上のはずなのだが……なんでだろ？

向かつた先の学校は大きかつた。いや、大きすぎた。集められた人数はこれの半分でも充分の人数だし、この島にいるほかの先生方もすべてを集めても両手でことが足りるだろう。

「さ、村雨様のお部屋はこちらです。どうぞ、ついてきてください

ね  
」

学校にはいつて今度は地下へと向かつ。地下にはどうやら居住区

があるようだ。地下に進む」とに僕は何かを感じ始めていた。

「・・・なんか寒くありません?」

「ええ、地下ですから・・・それと、噂ではこの地には守り神としてどこかの“一族”の

当主の墓があるそうですよ?この時期にいつもこのやつなことをしていますのでもしかしたら怒つているのかもしませんし、ちょっと驚かしてやる?と思っているだけかもしれませんね。ああ、夜中に肝試しを行つても構いませんよ?毎年、そのようなことをして行方不明者が出来ますからねえ。おばけって実際にいるんでしょ?うか?そこは笑つて言つところじゃないだろ?と思いつつ、僕は美奈さんの後ろを追いかけていく。

「それとですね、この島には立ち入つてはいけないといわれている場所が数箇所あります。間違つて入つてしまつたとしても助けることが出来ないので気をつけてください。先ほどの話と少々被るところがあるかもしれませんが、当主の墓があるのは立ち入り禁止区域のどこかだそうです。あ、学校内にも勿論ありますので気をつけてくださいね?ちなみに、私たちが向かう村兩様のお部屋の隣も既に立ち入り禁止区域ですからね」

うわつ、かなり嫌なところに止められてしまつなあ・・・しかも、なんでそこまでうれしそうなんでしょう?僕としては強制拉致で既に参つているんですが・・・

「さて、ここです」

いきなり美奈さんが止まつたので僕は前につんのめりながらも自分の部屋を見る。今まで見てきたように廊下の左右に取り付けられている扉と何の代わりもない。別に僕の隣が既に壁だつたりしないし、まだまだ奥には部屋だつてあるし、人の気配もする。

「ここから先は立ち入らないほうが身のためですので、先に申しておきますね。どうしてもというときは私を連れて行ってください。

危険ですからね・・・わかりました？」

少しだけ真剣そうな表情を見せて僕にそう告げ、返事を待つているようだった。

「・・・わかりました。でも、何がこの先に・・・？」

「知ることはいいことです。ですが、勉強をするためには時間を犠牲にしなければなりません・・・この先にあることはもしかしたら時間以外のものを犠牲にしなければならないかもしませんよ？」

そういうて微笑む。だが、その顔がせんぜん笑つていなかつたりしたものだから僕は

「あ～そなんですか・・・じゃ、お部屋に入つていいですか？」  
とたずねて勝手に入つたのだった。ちょっと疲れたので部屋の中で休もうと思ったのだが・・・世の中とは残酷なものだった。いや、意外と僕にだけ厳しいのかもしない・・・これつて僕の被害妄想？

「やあ、時雨君」

「剣治！？」

僕の目の前に現れたのは僕の学校の親友である剣山剣治(つるぎやまけんじ)だつた。少数の“一族”の次期当主といわれており、その実力は郡を抜いていた。生徒会長を現在やつており、生徒中心の学校運営を目指している。そういえば、来年には当主になるつていつたかなあ？まあ、剣治の実力ならここにいてもおかしくないのだが・・・

「何で僕の部屋にいるの！」

「心配しないでくれ。私は別に君の趣味が実は“年上のお姉さん”だつたとは言いふらさないわ」

そういうつて僕の後ろに立つている美奈さんを見ている。

「え、この人はお手伝いさんだよ？剣治にもいるでしょ？」

「まあ、先ほどまでいたな。だが、私のお手伝いさんは猿だつたぞ？」

剣治の目は

「なぜだ？何故この私に君のよつなお手伝いさんがついてくれないのだ？」と語つていた。その視線を美奈さんは見事に理解したらし

い。僕から一步前へ出るとこ本と咳をした。気がつけばメイド服になつてゐる。いつ着替えたのだろうか？

「…………」一言で申し上げますと、今までとつてきた行動が一番よいもののみ、お手伝いさんなど必要ないと考えられていてこの度はつけられなかつたのでしよう。しかしながら剣山様、あなたのお部屋は校長室の隣だと思われましたが？

「うん、その通り……私の部屋は一階の校長室の隣。だけど、まあ……知り合いがいたつて聞いてここまでやつてきたのさ」

僕になにやら用配せをした。その意味をきちんと理解できたかわからないが、僕は剣治が何をしたいのか、僕にどうして欲しいのか僕なりに理解した。

「じゃ、私は時雨君の顔を見に来ただけだからおことませせてもうりいましょう。じゃあね、時雨君」

剣治はそのまま去つていき、僕と美奈さんが残された。

「美奈さん、ここから一番近いトイレはどこかな？」

「トイレですか？部屋に備え付けられていますが？」

「ううん、ここは学校なんだし、共同のトイレがいいんだけど……・どこかな？」

「一階にあります。お連れしましょうか？」

「はい、お願ひします」

僕らは荷物を置いてそのまま一階へと向かったのだった。

一階の男子トイレを見つけ、僕は美奈さんに外で待つてもうつことにして中に入る。

「やあ、来たね？」

そこには剣治があり、先に用を足してこるようだつた。

「どうかしたの？」

「私なりに思つたんだが……」「なんかいるぞ？しかも、動いてる……いや、地下で蠢いている。まあで、何かを求めるようだぞ？」

シリアルスな雰囲気が立ち込めるなか、用を足している剣治の前のほうからも煙が立ち込める。おいおい、雰囲気台無しだよ・・・と思つた僕だったのだが、とりあえず話を聞くために外の美奈さんに「大をしてきますね」と伝えておいたのを幸運に思つた。

## 第一話・舞い散る桜の元で舞う待ち人（後書き）

さて、以前短編でかきました小説なのですが、非常に間をあけてしまって申し訳なく思っています。ちょっとわかりづらいくつて人もいるかと思いますが、これからゆっくりと物語は動いていきますので長い目で見てもらいたいです。では、これからよろしくお願ひしたいと思います。

## 第二話・待ち人は刃を持つ人を待つ（前書き）

（作者とのお約束）寝る前には歯磨きをしましょう。あと、小説を読んで何か感想があつたら感想を書きましょう。作者すべてがそれを望んでいます。

## 第一話・待ち人は刃を持つ人を待つ

奴が来た

奴は私の近くを通つた

だが、まだ気がついていないようだ

こんなにも近くにいるのに……

こんなにも私は気がついて欲しいのに……

……だが、奴が気がついたそのときに私は奴と刃を交えなければいけないだろう……

二、

剣治の目は真剣そのものだった。だが、場所が場所だけになんとか力が入らない。

「まあ、私もこっちに来てまだ間もない。大体次期当主としての実力があるものだけがここにくるということなのに君が来ることがよくわからないのだが……私たちの身に危険が及ばないようにがんばることだろうね。どうにも、納得いかないことがあるから……・時雨君、君も何か気がついたらここに来てくれ。じゃ、僕は先に出させてもらひよ」

一方的に話して剣治はトイレから出て行つてしまつた。残された僕は何もせずに手だけを洗つて外に出る。外にはジト田でこちらを見てくる美奈さんが立つていた。

「……遅かつたですね？」

「ま、まあ……結構がんばって生み出しましたからね？今頃僕の

生み出したものは旅をしているんじゃないでしょうか？下水道あたりに・・・いえ、ここは島ですから海水浴？」

愛想笑いを浮かべて剣治のことには触れないようにする。しかし・・・このお手伝いさんは本当にただの“お手伝いさん”なのだろうか？それにしては常人とは違つ視線を感じるのだが？

「じゃ、学校は明日からありますので、今日のところは部屋に戻つてください。あ、夜は外に出ないようにしてくださいね？では、おやすみなさい」

「・・・・僕の隣のベッド寝ているあなたのお部屋はどこですか？」夕食は部屋で簡単なものを取つてそれで終わり。そして、そのまま美奈さんの言わるとおりにお風呂にはいつて次は寝る準備をしたのだが、彼女もいきなりパジャマになつた。

「いえ、部屋数が足りないのでこれは妥当な線かと・・・何かおかしいところがありますか？あ、このパジャマでしようか？」

可愛いくまのプリントをついたピンクのパジャマを伸ばして見せて首をかしげる。

「・・・やはり、少しばかり少女趣味だつたでしょつか？」

「いや、パジャマじゃなくて・・・あ～もういいです。静かに寝てください」

考えていても埒が明かないし、意外とこの人には注意を払つておいたほうがよさそうだったので僕も自分のベッドにもぐりこむ。電気も消されて辺りには静寂が訪れる。

「・・・・」

眠ることができないのはなぜだろうか？隣に美奈さんがいるからか？ああ、羊を数えれば僕は眠ることが出来るのではないのだろうか？羊が一匹・・・羊が一匹・・・ぐ～つ

僕が立つてゐるところは闇だ。目の前にあるものは大きな扉。ここはこの学校の地下一階・・・なぜだろう？ここがどこだかすぐ

にわかつてしまつた。

僕は誰かに話しかける。

「・・・・・あなたが・・・・・」

相手は答えない。相手が持っているものは僕らの“一族”で自らが作り出す、水の刃だった。切れ味ではなく、激流で相手を引きちぎるような感じに使うものだ。相手はそれを僕に向けた。

「村雨様？村雨時雨様～？」

「・・・・・あ、う～ん？」

目が覚める。なにやら意外とあつさりとした夢を見たものだと・・・・・思い、目を開けるとそこには見ず知らずの女性がいた。あ、そういうえばここはいつもと違う場所なのだ。それをようやく頭の中で思い出して僕は返事をする。

「あ、美奈さん・・・・・」

「やつと起きましたか？今日は入学式ですので、早く起きてくださいね？この学校での制服は先ほど届きましたのでハンガーにかけています。どうぞ、着替えてください」

にこにことして僕を起こしてくれる。まあ、こういう生活に一時期はあこがれてもみたものだな・・・・・悪の組織を立ち上げたときにはこういう人を入れてもいいかもしないなあ・・・・・僕専属のメイドか・・・・うへつ・・・・あ～朝っぱらから何考へてるんだろ？

朝食も簡単なものをとつて部屋の外に出る。地下から一階へと向かうときに感じた嫌な感じは今日は感じず、僕はそのまま体育館と思われる場所へと向かつた。当然、先導してくれているのは美奈さんである。その途中、数人の人を見かけた。

「・・・・・の方たちは村雨様のライバルです。昨日話しましたが、

彼らも相当な実力者ですので気をつけてください。中には友達面で近づいてきて不意打ちを食らわせるようなことをしてくる人もいると思われますので念には念を押してください」

美奈さんはそのような人たちに目をくれることもなく、ただ黙々と歩いていたのだった。その後ろを歩いている僕ははたから見たらきっと姉と弟として見られているかもしない。

「・・あの、美奈さん、聞きたいことがあるんですけど?」「何でしょう?」

「確かに他の人たちも集められているっていってるのは聞いたんですけど・・・具体的にどんなことをするんですか?」

「簡単なことです、皆さんには一ヶ月間生き残つてもうりうだけ・・・ああ、きちんとしたルールなどは後で説明しますので、いえ、やはり今ここで私が話すよりも体育館のほうで好調自身が話したほうが理解も早いでしょう。それにいづれ人数は減ると思いますからね」

それつきり、黙つたままで彼女は体育館へと向かったのだった。先ほどよりも歩調を速めたような彼女に僕は一生懸命追いつくように早足になった。

なんてことはない、ただの体育館・・・中に入ったときに感じたことはそんなものだろうか?色々なところが壊れているところを抜かせば、だが・・・

『え〜この度は・・・』

お決まりの台詞を言った後に自称校長先生(推定六十ほどの女性)は話し始めた。僕は話を聞く一方、他の人たちを見る。この世界にどの程度の数の“一族”がいるのか知らないが、とりあえず、見ておくことにした。僕の周りは美奈さんを除くと男ばかりだ。

「・・・ええと、ううんと・・・

どうやら、さつと見て男子・女子が6・4のようだ。さつき見たのと変わらないなあやつぱり男子のほうが多いのか・・・と思つたそのとき・・・肩を掴まれた。

「・・・村雨様、きちんと話を聞いていたのですか？」

「あ、はい・・・ぱっちりです。今の僕は集音声の高いレコーダですよ」

隣に座っていた美奈さんにそういうわれてとつたに嘘をついてしまつた。ま、まあ・・・どうせ長かつた話だ。僕には関係のことのない話しに違いない。

『・・・では、先ほども言つたと思いますが詳しいルールを一時間後、先ほど君たちに告げた場所で行います。遅刻のないよう、お願ひしますね』

そういうわれてみんなが立つたので僕も慌てて立つた。

し、しかし・・・意外と大変なことになつてしまつたようだ。ちょうど、聞かなくてもいいと思っていたところでどうやら重要なことを校長先生は言つたらしい。それがどこかわからない・・・剣治の姿も見当たらないのでこれは万事休す・・・他人が動いたところでそれについていくしかないだろう。僕はそう思つて美奈さんと共に自室へと再び戻つたのだった。

「村雨様、入学式はどうでしたか？」

「いや、どうでしたかって・・・うん、あんまり僕らの高校と変わらなかつたような・・・」

「なるほど、確かに見た目はそうでしょうね。今日中にここにいる人たちは結構減りますよ。これは私の感ではなく、年間行事のようなものですからね。村雨様を信じてますよ。」

そうやって笑う彼女は何か知つているようだ。まあ、元はこの大會?のようなものを運営している側の人間なのだし、知つていて当然なのだろう。

一時間後、僕はルールを教えるという場所を探していた。美奈さんは途中で姿を消してしまい、僕一人で探すハメとなつた。まあ、話を聞いていなかつた僕が悪いのだし、脱落したつて別に構わないだろう・・・あ、家に帰つてゲームでもしたいなあ

「・・・そんなことより、頼りにしていた剣治の姿を見落としたのは痛いなあ・・・」

途中、剣治を見かけたので話しかけようとしたのだが・・・人の流れに流されてしまった。

その結果、今日の前を歩いているのは一人組の女の子だった。知らない女の子に話しかけるのはどうかと思ったので後をつけることにした。いや、誤解しないでもらいたいのだが、これはしょうがないことなのだ。ここ、はじめてくるところだし、迷子になつて脱落なんて恥ずかしい真似を僕はしたくない。つまり、これは正当な行動なのだ。

「うん、僕はこれで正しいんだ！」

心の中で叫んで目の前の二人組を追いかけること、数分。僕はようやく一つのクラスへと入ることができた。ここはどうやら南のほうの校舎らしい・・・

中に入るとほとんど女子だらけだった。

僕は入り口付近でぼさつとしていた。一人の女子が咳を一つして僕の目の前にやってきた。

「・・・男子は北側のクラスでしょう?」

「え・・・本当ですか!?」

「ええ、先ほどの話では『男子は北のクラス、女子は南のクラスに行つてください。』と言つてたわ。ねえ、そうだつたでしょ?」

後ろのほうにいる女子たちに尋ねる目の前の女子。当然のように彼女たちは頷いたのだった。そして、なんだか敵意を僕にむけているようにも見えないでもないなあ・・・何故?

「・・・すみません、間違えました」

僕はそいつて出て行くと損したはずなのになんだか嬉しかった。なぜだろう? やつてはいけないことをやってしまったようなこのど

きどき感は？

「待つて、君が行つてゐるほうは西の方角よ。そつちじやないわよ。」

「あ、そなんだ・・・」

何をしているのだろうか、僕は・・・どうやら方角もわからない  
ようになつてしまつたらしい。そなへ、いい病院を誰かに教えて  
もらつたほうがよさそうだなあ・・・

「私が教えてあげるわ。まだ、間に合つと思つからね」

そいつて先ほど親切にしてくれた人がまたもやおせつかいを勧  
いてくれたのだった。

## 第一話・待ち人は刃を持つ人を待つ（後書き）

前書きでめちゃくちゃわかつたような口を叩いてますが、それは事実だと思います。さて、連載二回目ですが、まだ話があ見えていない人もいるんじゃないかなあと思っていますので先に補足を入れておきます。詳しくはこの話が終わって時雨たちが通っている学校のほうに話を変えてから詳しく書きたいのですが、時雨たちが住んでいる世界は少々変わっています。今のところは何の変哲のないことなのですが、実は、既におかしいところがあるのです！じゃ、順を追つて説明していきますので、これからもよろしくお願ひします。

## 第三話・記憶が話を変えるのか？（前書き）

（作者とのお約束）ケータイ小説を見るとときはケータイの料金に注意して田を画面から三十センチほど離して見てね。

## 第三話・記憶が話を変えるのか？

奴は残る

奴は必ず私と再び出会つだらう

この仮面の下に私はこる

今すぐにでも正体を明かしたい

明かしたところで覚えてはいないだらう

……だが、覚えていれば話は変わるだらうか……

三、

僕の隣を歩いている彼女の名前は炎宮焰華さんだそうだ。えんぐうぱのか

「へえ、次期党首じゃないのに選ばれたんだ？そりや、すじいねえ？」

「まあ、すじいかどうか知らないけどね……何でだらうかと僕は思つよ……ここに来る前、どんなことがあつたのかさっぱりだし、今気がつけば僕つていつ拉致られたのかわかんないんだ」

「あ、それは……村雨君の場合もちょうど夏休みに入つてすぐだと思うけど？ちなみに私の場合は学校から出て気がついたら田の前に黒い車が止まって……中から人が出てきて名刺を出されてそれを見つめてたらいつの間にかここに来てたの」

そういうつて笑つてているのだが、それは充分誘拐だらう……この人、今のご時勢がどのようなものかわかつていてるのだらうか？夜にお外を歩いていたら襲われる世の中だ。

そんな話をしながら歩いていると

「キーン、ローン、カーン、ローン」という音が聞こえてきた。お互いに顔を見合させて次に手につけている時計を覗き込む。

「……あのさあ、今、何時かな？僕の時計で、気がついたら動いてないんだけど……」

「……私の時計、どうやら十分遅れてたみたい……」

僕らは一人、その場に膝をついた……と、同時に……先ほどいた方角と、これから行く方向から同時進行で大きな音が聞こえてきた。そうだなあ、例えるなら何かが爆発するような音だった。

「！」

目を見開いて一人してとりあえず先ほどの女の子ばかりの部屋のほうへ取つて返すと（男子？ああ、見知らぬ男は後でいいでしょ？）そこには女子がほとんど倒れていた。肩膝ついて生き残っている女の子も一人だけいたのだが……そこへ、教室に備え付けられているテレビが勝手についた。

『残り、十人……先ほどの攻撃を耐え忍ぶことが出来たのがこのくらいですか？去年の人たちは君たちの一倍はいましたよ？ああ、失格者ることは気にしなくて結構。別に彼女たちは死んでしまったわけじゃない。ちょっと眠つてもらつただけだからね』

画面に映つたのは

「音声、おんり～」とかかれた文字だけで聞こえてくる声はしゃがれている。ボイスチェンジャー？

「……では、残り十人……残りの期間を生き抜いてください。ああ、協力はしたほうがいいでしょ。これからあなた方が相手をするのは並大抵の相手ではありません。今回の人数から見て一定期間を生き抜くのは不可能でしそうから、特別ルールとして二つの場所にたどり着ければそこでこのおふざけは終わりです。がんばってください」

そういうつてテレビは完全に沈黙。何も起こらず、とりあえず僕と焰華さんはこの場所での唯一の生存者（失礼、倒れている人は寝てるだけでした）に近づいていく。

「・・・・・はあ・・・・・はあ・・・・・寝るな・寝るな・寝るな！」  
突然、そんなことを言い出した。どうやらこの煙を対処するため  
に自分なりに戦っているようだ。その表情は険しく、人を一人殺し  
たときのような表情もある。

「くるな！くるな！くるな！羊など・・・食べてやる！…」

何を言い出したのか非常に理解しがたいのだが、彼女はきっと必  
死に頑張っているのだろう。とりあえずここからだしてあげたほう  
がいいので焰華さんにそのことを伝えると彼女もうなずいた。

「そうだね、とりあえずここから出たほうがいいようだし・・・・・  
村雨君は彼女の右のほうに近づいて・・・・そしたら私が一気に気絶  
させて運ぶのを楽にしてあげるからね？」

「・・・・・あれ？ 左から押さえつけるわけじゃないんだ？」

焰華さんの目が怪しく光つてあり、とりあえず人死にがでないこ  
とを祈りながら右のほうから彼女を抑える。

「落ち着いて！」

「触るなあ！このもじもじ野郎が！」

完璧に錯乱しており、いまだに偽りの世界で向かい来る羊の群れ  
を退治しているのだろう・・・・そして、彼女は僕を間違いなく何  
かの“能力”で吹き飛ばした。

「ぐわっ！」

「あれ？」

今のは僕ではない。飛ばされた僕は壁に衝突したのだが、痛  
くもかゆくもなかつた。

「剣治！？」

「おや、時雨君も残っていたのかい？いや、それより何故君がここ  
に？ここは女子が来るべき教室じやないのか？」

「いや、それを言つなら剣治もこっちぢやないだろー！」

「・・・そこは、ほら、あれだよ・・・まあ、私としては非常に  
言いにくいことなのだが迷子になってしまってね・・・ちょうど感  
ではいつたこの教室にいつせいに女子が来るものだから驚いてこいつ

やつて隠れて彼女たちが去るのを待っていたのを。そうしたら出るに出られないような状況になつたというわけさ。まあ、状況が変わつたようだし、今は学校に籠城するしかないんじゃないのか？」

そういうて外のほうを指差す。あからさまに話を摩り替える気が満々なのだが、言われたとおりに視線を外に移す。

「・・・なんだろ、あれ？」

「さあね？」

剣治が指差す方向いるのは“影”だった。人の形をした“影”がこの学校の中に入ろうとしている。中には何だろうか・・・・人形のようなものをもつて喜んでいるようなものもいる。あれは・・・・なんだろうか？マッスル・ポーズを決めている奴もいる。

「お、あれなんか時雨君に似てないか？ほら、なんだか根暗そうだぞ？」

「何言つてんの、あつちのほうが剣治によく似てるよ。わつと、近くで見たら檄似だよ！」

「二人とも、とりあえずここから逃げるわよー！」

後ろから首根っこを掴まれて僕らは引っ張られるようにして廊下に出たのだった。先ほどまで見えない羊と戦っていた女の子は気絶したのか立つたまま動かなかつたので僕が引っ張つて言った。はかつたとしか考えられないタイミングで、放送が流れ始める。

『あ～先に言つておくが君らが確認した奴等は夜にならないと学校内へ入れない。奴等を倒すも自由、逃げるも自由・・・すべてが自由や。ちなみに夜までに地下の自室へと戻れば身の安全は保障しよう。無論、君たちが置き去りにしてきた眠つている人達も既に回収済み・・・彼らは家に帰つてもいい。この場所での記憶を忘れてもらつてね・・・ああ、気をつけてもらわないと・・・外にいるあいつらも馬鹿ではないからね・・・』

どこへ向かうかは自由らしいのだが、困つたことに行くべき場所を僕らは知らない。いやいや、自由すぎてどこに行くべきかわからぬ。自由すぎるRPGで迷子になつた気分だ。

「・・・ 剣治・・・

「何かな？」

「今度の英語の和訳、僕だつたよね？」

「そうだつたなあ、確かにそうだ」

「二人とも！ 現実逃避してないで何か考へないと！」

剣治と僕に厳しい現実を見るように彼女はそういった。いやあ、厳しい現実よりも虚実のほうに僕は逃げるかなあ・・・・

剣治はそんなことを言つてゐる焰華さんの前に出て咳払いをした。  
「こほん・・・ ところで時雨君、このちよつとつるとい女の子は誰だい？」

「ああ、この人は・・・ 炎宮焰華さん。火を使つ“一族”だつて。好きな食べ物はトマトで・・・ 好きな色は赤、おでんばじやじや馬娘だつてさ・・・ あ、誕生日は8月7日だつてよ・去年は友達に祝つてもらつたそつだつて。彼氏はいたらしいけど、些細な価値観の違いで先月別れたつて・・・ 彼女の友達はせっかくやつてきた春を自ら冬にしてしまつたつて言つてたそつだみ？」

剣治はさも驚いたように僕のほうを見つけていた。

「そんなことまで言つていたのかい？」

「ちよ、ちよつと！ 私はそんなことまで言つてないわよ！ 名前しか名乗らなかつたはずだし！」

顔を真つ赤にしてそんなことを言つてゐるのだが・・・

「え、嘘！？ さつき話してゐるときこどんどん話していつたのは焰華さんじゃなかつた？ いやあ、僕のほうから話しかけようとしたら逆に彼女のペースに乗っちゃつてさ・・・ 結局、僕は名前しか名乗れなかつたよ？」

剣治はしらけた視線を焰華さんに送つてゐる。

「・・・ 口が軽い女の子か・・・ 真つ先に裏切りそうなタイプだな。私としては興味がわかない。私は口が軽い男と尻が軽くて口が軽い女は嫌いなんだ」

「私もあんたみたいな利口ぶつてるやつは大嫌いよ・」

お互に初対面でこんなに悪口を言い合えるなんてす”いや……と感心している場合でもない。いまだに肩を貸している女の子は「羊が……いや、私はこんなところでは負けない！こんなところで、負けてたまるかああ……」とぼやいてるし、まだお天道様はお空に輝いているのだが、油断は出来ない。そもそも正午だ。

「とりあえずさあ、昼食を探しにいかない？」

「…………」

いがみ合っていた一人はそつぽを向いたのだが一応、僕の意見には賛成してくれたようで、再び歩き始めた。窓の外にはさまざまなかつちにこようとしている

“影”たちがこつちにこようとしている

「…………時雨君、他の連中はどうしたんだろうな？」

「さあ？どうしたんだろ……男側には行つてないし、残りの十名を僕たちで埋めたとしても残りは六人だと思うけど？後は全部男子じゃないかな？」

「まあ、今頃あいつらの餉食になつてるんじゃない？あんたもあんなといいんじやないかしら？」

「そつなつても別に構わないね。意外と君は襲われないで逃げられるかもしれないねえ？」

いがみ合つ、二つの心……彼らが和解する口がいつか来るのだろうか？

「…………」

羊さん（仮名）に肩を貸したまま、僕らは食堂を探してさまよい始めたのだった。

「あ～そういうえばさ、先生やお手伝いさんの姿がないね？」

「ん～そういうえばさうだね？」

「まあ、私のお手伝いさんは今頃畑を荒らして農家のおじさんに追いかけられているだろ？あのお猿、どこに行つたんだ？てか、猿には無理だろ、猿には……」

そんな話をしながら歩いていく。外のほうでは誰かが叫びながら逃げているようだ。

「うわあ～もう駄目だあ！誰か助けてえ！」

……幻影。あれは幻影さ・・・・僕らは自分の実力を知つてゐる。

だから、自力でがんばつて！ごめんね

## 第二話・記憶が話を変えるのか？（後書き）

やつてきました第二話。第一話から物語が始まる前にいつも書いているあの人物・・・さて、あれは一体全体誰なのでしょう？いや、既にこの時点で今回の話の主要人物たちは登場しているんですけどね。その中に、いるかもしません。では、また次回でお会いしましょう！

#### 第四話・来ると言ひじの其の心（前書き）

～作者とのお約束～ 小説を読んだ後は余韻に浸りましょ。あと、泣きたいときは泣きましょ。

## 第四話・来ると信じる其の心

今年も遂にくだらない余興が始まった

私の元へ来るか、あの男の元へ行き着くか・・・

奴はどうするだろつか？

私の元へと来てくれるのだろうか？

よけいな者を連れているようだが、奴がここへ来る確率をあげるものだと思えばいい

奴はきっと、来てくれるに違いない

### 四、

校庭のところで一人の男子生徒が影から逃げている。泣きながら逃げているところを見ると必死さが見ているこっちにも伝わってく。そして、その男を見て一早く焰華さんが飛び出よつとした。僕と剣治はそれを当然のように止めた。

「何で止めるのよ！」

「落ち着け！奴は別に死ぬってわけじゃないんだ。いやあ、尊い犠牲だった・・・さて、あの影に捕まつたらどうなるのか見させてもらおうか？」

「そんなことを言つてる場合ぢやないでしょ！助けなきや！」

「ちょっと待つて！あの人だって仮にも実力者ぢやないの？自力で逃げれるかもよ？」

当てずっぽうでそういうてみると他の一人も納得したよつだ。だが、その現実はどうやら甘かっただよつだ。男子生徒は僕らの目の前

の窓の外を走り抜けた。

「・・・もう駄目っす！」

僕らが彼の逃避行を目撃して一分も経たないうちに彼は石に躓いて転んでしまった。そして、迫り来る“影”に今度は頭を下げ始めた。それを見た“影”たちはなにやら数人で会話を始めて動きを止める。哀れんでいるようだ・・もしかして知能があるのだろうか？「すいません・・すいません・・すいません・・すいません・・すいません・・

「おいおい、今度は哀願かよ・・・時雨君、行くぞ！あんな人として惨めな行為はやめてもらわなくてはな！なんだか見殺しにする気が失せた」

「わかった・・・やつぱり見殺しにする気だつたんだね？」

先に走つていった剣治。僕は焰華さんに羊さんを見ておいて欲しいことを告げると窓を開けて外へと躍り出る。僕らに群がつてくる“影”を水で弾いて進む。

「・・・せやつ！－」

剣治は右手に持つてゐる剣をふるつて先へと進んでいく。どうやら哀願攻撃ももはや限界が来たようで・・・彼の目前まで“影”たちは迫つていた。

「つづくりえええ！」

剣治は握つていた剣を影に投げつける。光り輝く剣はそのまま三人の“影”に突き刺さつて“影”たちは姿を消した。それを見て何とか立ち上がる男子生徒。

「あ、ああ・・・助かったっす！あんたたちは男だけど女神さまっす！」

「ほり、そんなことはいいから逃げるぞ！私がここを止めておくからあそこで手を振つている女子生徒の所へ走つて行くんだ！時雨君は急いで彼を援護！」

剣治は何も持つていない手に次の瞬間には剣を握つて男子生徒の脱出口を開くために突き進んでいった。突き進んで行つた後には影

が切り裂かれて転がつていいく。

「そういうわけだから、早く行つて！」

僕は男子生徒を押すようにして前へと進む。彼の目の前、右、左、はたまた下からやってくる“影”たちをふとばしながら焰華さんたちのところまで戻ってきたのだった。剣治は剣治で“影”たちの肩などを踏んで戦つている。

「お、俺を踏み台に！？」

と聞こえたのは気のせいだろう。

男子生徒を窓の中に放り込んで剣治に手を振る。

「お～い、救出完了！」

「わかった、今行く」

影の波を避けるようにして剣治はスムーズにこっちにやつてくる。その間、僕と焰華さんそしてようやく正気になつた羊さんが寄つてくる“影”たちを食い止める。

「・・・よっしゃ、ゴール！」

剣治が入つて急いで窓を閉める。普段だったら質量を感じて窓が割れそうだったのだが、見えない何かに阻まれたように“影”たちはそこで弾き飛ばされた。

「・・・・一応、まだ昼だから校内に入ればこっちのもんつてわけか・・・・」

乱れた制服を戻しながら剣治は咳く。僕らは僕らでその場に座り込んでいた。

「いやあ、あなたがたのおかげで助かつたつすよ～」

先ほど助けた男子生徒は軽薄そうで糸目の人だった。

「なはは・・・」と笑つており、こいつは役に立たないかもしれないとここにいるみんなが思つたに違いない。

「あ、俺の名前は來月雲らいづきくもつて言つづす

」

「なはは・・・」と笑つているのだが、この人は本当に強いのだろうか？ とてつもなく疑問に思つていたのだが、剣治が彼に近づいて

いつた。

「……何故、外にいたのかね？奴らが外を徘徊していることを知つていて興味本位で外に出たのならもう一度外に放り出してやうと思うのだが？」

掛けているメガネが光つている。まあ、危険を犯してまで助けたのだからそのくらいはいいかな？いや、そうしたら何のために助けたのかわかったもんじやない。

「あ～えつと・・・ほら、先ほど爆発があつたつしょ？あの時ちょうど外を眺めていたらその爆発で放り出された・・・いや、誰かに掴まれて放り出されたんすよ。それで、あいつらが現れる前にとりあえず校舎の中に入ろうとしたんすけどねえ・・・気がつけば囮まれて絶体絶命！そんなときにはあなたたちが助けてくれたつてわけですよ！」

また

「なはは・・・」と笑う壘という男子生徒・・・まあ、明るい性格というのはわかつたのだが・・・

「じゃ、何で戦わなかつたんだ？あんたは確か雷の“一族”だつたろ？顔を見て思い出したんだが・・・私の家のものにお前のことを知つている人がいたから聞いたんだが・・・今までの雷の“一族”中でもつとも強いと聞いてるぞ？」

剣治はどうやら壘さんの事を知つていて、詰め寄つている。  
「あ～まあ～わけありなんすよ。俺だつて使いたかったんですけどねえ・・・今後は大丈夫つすよ。もうご迷惑はかけないつす、隊長殿！」

そういうて敬礼のポーズを見せるのだが・・・これからが心配だ。  
「・・・んで、時雨君、君は彼女から名前を聞いたのか？」  
「え、い、いや？さつき気がついたばかりだから聞いてないけど？」  
「それならちょうどいい。名前を名乗つてくれ。この状況のことを理解できていないのなら私がここのみんなを代表して説明したいと

思つ「

やはり生徒会長としての素質があつたのだろう……。」  
の主導権を完璧に手中に収めた剣治は話を先へ先へと持つていく。  
剣治に名指しされたちょっと暗めのイメージがある黒髪ロングの彼女は自分のほうを指差す。

「……うん、君だ。先に名乗つてほしいのならこちらから名乗つて構わない。私の名前は剣山剣治。こっちの根暗が村雨時雨、こっちのうるさい女子生徒が炎宮焰華でこの抜けている男が来月轟ださて、これで充分だと思うが……君の名前は？」

「……風馬美羽」

たつたその一言が僕らのいるこの教室の温度を下げた。僕以外の人たちはいつもと違う表情を見せている。剣治は冷静にしていながらも隙を見せない表情を。焰華さんは完璧に臨戦態勢をとっているし、軽薄そだつた轟さんも糸田を開けて鋭い瞳を覗かせている。そして、僕は……

「あれ？ 知り合い？」

完璧に空氣を読めないような人間と化していた……

「……時雨君、風馬美羽を知らないのかい？」

少々……いや、かなり呆れたように僕に視線を向けてくる。

「うん、まったく知らないなあ……」

焰華さんが首をひねるようにして咳く。

「……戦場に……散り逝く……羽……その羽根は散つてゆく者の羽ではなく、散らせたものの羽である……知らない？」  
どうやら有名な話だつたようなのだが、彼女は残念ながら僕は……

・

「知らない」

「……あ～時雨君って言つたすよねえ？ おたく、先ほどの戦いで見せてもらいましたけど次期当主じゃないんですか？ 結構な身のこなしでしたけど？ 違うんすか？」

「え？ うん、そうだけど？ ちなみに僕の妹が次期当主」

「ああ、そうだった。時雨君は次期当主じゃなかつたんだつた……時雨君、まれに他の“一族”同士の争いがあるのは知つてゐるだろう?」

その場で生徒に教えるように剣治が説明を始める。

「うん、知つてゐるけど?」

「その仲介役としていつも“風馬家”つて言われているどこのにも属していない人たちがいるんだつてさ。それで、とりあえずまずは力で双方を鎮めさせる。そんで、今度は交渉に移行……その争いに出ていた人物たちはすべて行方不明者となるんだよ。それで、最近は“美羽”つて名前が有名なんだよ」

「へえ、そりなんだあ……美羽さんつてすごいんだねえ?」

感心していると畠華さんが僕に噛み付いてくる。

「違うでしょ! 美羽つて言えば畏怖の対象なのよ! 私のところの“一族”も何人行方不明になつたことか……」

ため息をつく畠華さんなのだが、僕の“一族”でも争いや喧嘩のことを聞いたことは何度かある。

「でも、その喧嘩つて争いに関係ある人たちしかしないんだよね?」

三人の誰かに尋ねるよつして話しかけてみると畠華さんが糸田に戾して話し始める。

「そつすね。基本的に争いを起こしたもの同士が喧嘩をはじめるつす。だから、大体は自業自得となるつすよ? 風馬にやられる者達は考への足りない者たちだつてきくつす」

そういうて首をすくめる畠華さん。

「とりあえず、美羽が裏切らない限りはどうやら実力不足に陥ることはなさそうだね」

そういうて咳く剣治

「あれ? 美羽さんつて裏切るの?」

本人に直接聞いてみるのだが彼女は黙つていた。

「……あなたたちが私を見捨てるのなら、私は喜んであなたたちを道連れにしようつ……」

ものすぐ

「私、不機嫌なんです。あなたたちの言葉で傷つけられました」というオーラを発散しながらそう述べた。

「・・・見捨てないようになんに最善をつくせり・・・・・といあえず、昼食を食べに行こうか?」

轟さん、焰華さん、剣治、僕、美羽さんという順番で（あれ？僕と剣治の間、一つ開いてない？）ならんで歩いていく。食堂を見つけてそこへはいるとき、美羽さんは僕にしか聞き取れない声で呟いた。

「・・・さつきの、嘘。心配しないでいいから・・・」

彼女は暗く笑つたのだった。先ほどの言葉は彼女なりの[冗談だつたのだろうか？

## 第四話・来ると言ひじる其の心（後書き）

第四話となりました。いや、別に何かあるわけでもないんですけどね。さてと、僕としてはうれしい限りです。短編からこのようにして連載になつてくれて・・・まあ、いいことですね。ちなみに、前書きの～作者とのお約束～は次回で終了です。

## 第五話・皿身の約束（前書き）

「作者との約束」 小説の初期段階を読んだら続けて読み続けましょ。面白くないといつ小説もいずれ面白く感じることができるようになります。

## 第五話・自身の約束

“影”と戦う奴は強かつた

初めて私の元へとやつてきたときは比べ物にならない

私の“能力”の上に間違いなく行つていい

だが、いすれ奴の“能力”は自ら潰れるだらう

所詮は借り物・・・それは“能力”といえど変わりはない

.....期限までに私の元へたどり着けるのなら、私は奴を助けよう

.....

五、

「いやあ、やはりご飯はカレーに限るわ！」

カレーを前にしてがつついている焰華さん。それを見て剣治がため息をついている。

「何故、もうちょっと優雅に食べることが出来ないのだろうか？」

シチューをゆっくりとスプーンですくつて食べている剣治。

「まあ、たのしいんならいいんじやないんすかね？」

そんな適当なことを言つてご飯と魚を食べている轟さん。意外と庶民派だ・・・

「・・・・うるさい・・・・」

静かな声でそう呟く美羽さん・・・はプリンを食していらっしゃいます。

「・・・さあ、まだまだありますのでどんどん食べてくださいね」

「」に来て美奈さんを発見。彼女は食堂で僕たちを待っていたの

だ。他の人たちはおなかが減っているようで彼女がここにいることになんら疑問を抱いていないらしい。僕はおにぎりを食べ終えると真っ先に彼女の元へ向かった。

「あら、やっぱり村雨様は私に氣があるんですか？」

「いえ、そんなことより美奈さん、他の人は？教師とか、他の人のお手伝いとか・・・」

「ああ、先生方は巻き込まれると大変ですので地下ルートを通りて帰りました。残念ながらそこから逃げることは私たちには出来ませんよ。期限が過ぎるかやられて全員GAME OVERで記憶を失つておうちにつれて帰られるかです。ちなみに、私以外のお手伝いさんたちは奥の部屋でテレビを見ているんじゃないでしょうか？今日は私が食事を担当しますからね。どうでした？おいしかったですか？」

「ええ、おいしかったです。ところで外にいるあの・・・」

「外で何故か僕らと同じようにランチタイムに突入している“影”たちを指差す。

「・・・“影”のような人たちは一体全體なんですか？」

「あれですか？あれは簡単に言つなら不死なる者達ですね・・・いえ、既に死んでるから不死かどうかはわかりませんけどね。知能もありますし、相手にばれないように窓に近づいてみたら面白いことが起きますよ。」

美奈さんにそういうわれたので相手に氣がつかれないようにして窓に近づく。まだ太陽は空に上がっており、彼らが中に入つてくることは出来ないだろう。

窓に近づくとなにやら聞こえてきた。

「・・・つたくよお、仕事とはいえ、こっちの世界の連中は人使いが荒くねえか？」

「そうだよなあ、まあ、高給だからいいんじやね？ほら、俺たちつて結構怖いじゃん？」

「そうだな、見た目だけが怖いからなあ・・・あ、こっち見てる

ぞ？」

僕のほうに視線を向かわせる相手。そして、可愛いランチボック  
スをさり気に後ろに隠してこっちへと

「あ～ぶあ～」とゾンビのような奇声を発してくる。

「あ～すいません。あの、立ち聞きしてしまって……」

「・・・・・ちつ、ばれたのか・・・だが、さつさとあっちに行け。  
仕事を邪魔するんじゃないのーほら、俺たちは謎の細菌に感染され  
た人間つてことにしておいてくれーじゃ、今からもう一度行くぞ？・  
・・・ぶあ～ぶあ～」

「そうだぞ、さつせとあっちのお前らの仲間のところに行けっての  
！ぶあ～ぶあ～・・・相棒、この鳴き声であつてるのか？」

「え？あつてるだろ？映画もゲームもやつたし、そつだなあ、弾を  
温存してたらあつせりやられた記憶もあるなあ・・・ほら、さつ  
さと行けよ！」

なんだかとつても嫌なも（ヒーローショーの裏方を見てしまつ  
た気分）を見てしまつたと思つてしまつた僕はもう一度“影”たち  
に頭を下げてその場を後にしたのだった。

「時雨君、何していたんだい？」

「あ～まあ～外にいた“影”たちの様子を見てきたんだ・・・・  
「そうなの？村雨君つて意外と度胸があるんだねえ？それで、どう  
だつた？」

「ど、どうつて？もつと具体的に言つてくれないと・・・・  
なんだか具体的に見てきてしまつた僕としては夢を壊された気分  
だ。美奈さんのほうを見れば彼女はにこりと笑つてい  
る。」「・・・何か、食べてた・・・？」

美羽さんがそんなことを言つてきていた。

「え、あ～可愛い・・・いや、ちょっとゲテモノだったかな？ほ  
ほら・・・モザイク掛けないと映せないような奴？」

「・・・なるほど～」「」

一同納得してくれているのだが……本当にこれでよかつたのだろうか？ そう思つて外のほうを見てみると先ほどの“影”と思われる一人組みが親指を立てて

「そりだ、それで間違つてないぞ！」 といつよつな表情（いや、真つ暗でわからんのだが……）を見せる。うん、どうやらこれであつていたようだ。

「じゃ、これからどうするの？ 外に出てみる？」

「何を望んでそんな危険なことを？ 私らが求めるものは安全にそして、記憶を維持したままでこの島を脱出すること。だから、さつきの放送であつたとおりにこの島のどこかにある“ゴール”に向かつて進めばいいんだ。残りの五人と顔を合わせていない今、私たちに出来ることはそれだけ……いずれ、生き残つていれば残りの五人とも会うことが出来るのではないか？」

剣治のその提案にみんなは頷き、立ち上がる。食堂を出る途中、先ほどの“影”的二人組のほうを見ると手を振つてくれていた。僕も手を振つたのだが……それがいけなかつたようだ。

「……ねえ、あなた本当に村雨君？」

「え？」

焰華さんが疑うような視線を僕に向けていた。その言葉に他の人たちが止まる。そして、僕にみんなの視線が注がれる。

「……さつきからなんだか怪しい行動を繰り返してない？」

完璧に僕を何かの犯人に仕立て上げたいような視線を送つてくる。

「……焰華君、どうかしたのか？」

剣治が彼女に尋ね、彼女は剣治のほうを見る。

「……村雨君つて怪しい。そつ私は思つてるのよ。大体、自ら“影”的近くによつて行つたり、さつきも誰かに手を振つていったじやない？ 彼のお手伝いの美奈さんつてひとつはこつち側にいるし……絶対に“影”的手先だわ！」

「ええっ！」

僕は驚く。そして、他の人を見るのだが……

「ふむ、確かに彼女の言つ」とも一理あるな  
「け、剣治！？」

「そうですね。元からあやしいと思っていたつす」

「・・・壘さん、あなたはすぐに心変わりをするのみなひとつだから  
別にいいよ」

「あ、私はの〜かうんとでお願いしますね」

「美奈さん、僕のお手伝いさんじやなかつたんですか？」

「・・・」

「その無言が逆に怖いです。何か、言つてほしんだけど・・・  
焰華さんのほうを見てみると、完璧に僕が

「女の敵だわ！」と言つてのけでいるようだつた。いや、何その表情？僕があなたに何かしましたか？

「とにかく！私は偽者と思われる村雨君についていきたくないわ！  
ここで剣治と村雨君の班にわけましょう！」

「え、そうしたら戦力が分担されて逆に危ないんじや・・・  
「俺も賛成っす！」

「・・・じゃ、多数決で決定だからね。どっちの班に行きたいか決めて。私は当然、偽者といたくない！」

そういうて剣治のほうに歩いていく焰華さん。あれ？気がつけば僕はいつの間にか偽者決定！？

「じゃ、俺も剣治君の班に行くっす！」

そういうてあつさりと剣治のほうに歩いていく壘さん。あんた、いづれ背後から襲いたいという感情が芽生えてきましたよ・・・  
「・・・じゃ、時雨君？私たちはこっちから行くから、君たちはあっちのほうからいってくれ」

「剣治、なんて君は白状なんだ・・・まあ、知つてたけどね

「じゃね、偽者」

「ひどい・・・」

「じゃ、さよならっす！」

「壘さん、僕はあなたを許しませんよ

「うして、僕のところに残つたのは美羽さんだけだった。ちなみに、美奈さんは食堂のほうへと僕らを見送つていつてしまつた。

「・・・・・」

「あの・・・・・」

「・・・・・大丈夫、私にはわかるけどあなたは本物。だから、私はここちに残つただけだから・・・・・」

それだけ言うと彼女は僕らが進むべき場所のほうに進み始める。気がつけば剣治と僕の班ではなく、剣治と美羽さんの班になつてゐる気がする・・・いや、事実上そうなつてゐるじゃないか！

「これからどうするの？」

「・・・・・とりあえず、その“ゴール”を見つける。あの三人は一度離れてしまつたからもう信じないほうがいい。なぜなら彼女たちが時雨を信じなかつたのと同じように離れてしまつたから。だから、私たちは自室に戻らずに動ける間に“ゴール”を探し当てる。そうしないと虚を突かれて負けてしまつかもしれない・・・・・」

美羽さんはそれだけ言つて再び歩き出した。その後ろに後光を感じたような気がした僕なのだが、やはり、寝ぼけているときは別人である。これは非常に期待できる人材が残つたのではないか？

「・・・・時雨、きちんとついてきて・・・・・」

振り返つて僕にそう促す彼女に僕は頷いて走つて彼女に近づいたのだった。

「うん、これからもよろしく！」

「・・・・・まあ、お互いやられなにようにがんばらないと・・・・・」

僕らは僕らの道を進むべく、新たな一步を踏み出したのだった。

## 第五話・自身の約束（後書き）

いやあ、終わってしまいましたね、作者とのお約束・・・自分でがんばったと思っても他人から見てみればがんばっているという部類にも入らないと思われますが・・・さて、そんなことはおいといて、今回の話にはいっていきましょうか？今日は見事に分かれるような感じになってしまましたが、それもよくあることです。作者はよく他人と食い違いが起きてしまいます。人間関係なんて些細なことで崩れてしまふということはご存知の通り？ですが、中には些細なことで喧嘩をして分かれてしまったとしても相手のことをきちんと見据えている人もいるということを美羽を通して伝えられたらしいと思います。では、そろそろこの章も後半戦に入りました。この章の終わりはどうなってしまうのか・・・期待している人は首を長くして、期待していない人は夜空にきらめく星たちを眺めて待っていてください。

## 第六話・過ちの消し方（前書き）

作者の脳内小説メーカーその一、「先輩、今度の時雨は上半身と下半身が合体して戦うつていうのはどひづりじょつ?」「後輩よ、考えろ・・・・・それじゃ、コメディーではなくてSFの世界になつてるからな?ほら、読者の皆様に何か一言言つんだよ?」「あ、皆さん、今回も短編から連載になつた小説をよろしくお願いします」「それ・・・・・挨拶か?」「大体、前書きつて注意書きを書くところですね?」「そうだ、だからこんな感じにするのが一番いいんだよ。え~皆さん、感想をお一つよろしくお願ひします」「・・・・・それ、注意か?」

## 第六話・過ちの消し方

奴は迫ってきてくる

もつまもなく、私の元へと来るに違いない

だが、まだ確定したわけではない

決まったことなど、一つなどないのかもしれない

過去のみ、決まったことなのだ

過去にやった過ちはビビリしたら消せるのだろう……

六、

僕の目の前を歩くのは僕より頭が一つ分小さく、物静かな少女だ。

「…………」

「…………」

僕らの間に会話なんてないし、張り詰めた空気が漂っている……  
いや、そうじゃないのかもしないな。ちょっと話しかけてみれば変わるかもしれない。世の中っていうのは自分から動かさないと  
いけないのだ。経済世界を巻き込めるほどでなくとも、この生き地  
獄のような静寂を打破することはできるはずだ。

「…………あ、あのさあ…………美羽さんって強いんでしょ？」

「…………強いかどうかはわからない……私は私に課された事を  
こなせるように努力をしているだけ……」

「そ、そなんだ……」

「…………こんなところでくじけている場合ではない。もつと攻めるの  
だ、僕よ……」

「・・・え、と、家はどの辺り？」

「・・・それを聞いてどうするの・・・？」

完璧に怪しい奴を見る前にシフトチョンジしてしまった美羽さん。ああ、どうしようか？こ、こうなつたらやけくそである！進め、進め！僕には前進あるのみだ！

「・・・彼氏とかいるの？」

か、完璧にはずしてしまった！そ、そんなで僕を見ないで・・・

「・・・・・・・私に興味でもあるの・・・・・？」

その無垢な瞳で僕を見ないで欲しい・・・・・は、話をそらさなくては・・・・・何か、何か辺りに会話を成立させるようなものはないのだろうか？

静寂な校舎に変わりはなく、一階を歩いている僕たち・・・・・そして、外を歩いてどうやって中に入ろうか考えている（フリをしているに違いない）“影”たち。中には僕に正体というより、それが仕事だということがばれたのを知っているのか露骨に僕に何かのサインを送つてくるような連中もいる。おい、そこ、そのポーズは何だ？

「・・・・・今度は、急に黙り込んで・・・・・変な人・・・・・」

遂に、遂に変人か・・・・・いや、まだまだ！何か会話を続かせねばいかん！そうしないと僕が絶体絶命のときに助けてもらえないし、良好な関係を保たなくては！絆が大切なのだ、絆が・・・・・

「あ、まあ、さつき興味があるのかって聞いたけど・・・・・ほら、やつぱり何かと知つておいたほうがいいでしょ？」

「・・・・・何を・・・・・？」

そんな不思議そうな顔をしなくてもいいじゃないか・・・・・ひへ、なんだかこの人は何も知らなさすぎるという感じがする。

「・・・・・その、お互いのこととかさ・・・・・」

「・・・・・・・そ、そんなこと・・・・・あなたといふところ、調子が狂う・・・・・」

いえ、調子が狂うのはこちらのほうです。見事に話すタイミング

などあなたの無口が妨げています。

「…………私のことを知りたいとここのなり、ここを出でから・・・教えてあげる・・・・・」

そういう顔を伏せたまゝにして歩き出す美羽さん。その後姿においていかれぬように僕は歩を進めたのだった。

「…………いい風・・・・・」

「そうだね」

そして、なぜだかそのまま学校の屋上へとやつてきました僕たち。ここまで来る間に交わされた会話は一つもない。なんだか外からは

「ひゅーひゅー」とか

「お熱いねえ！」などといつ非常に子供じみた言葉が聞こえてきた気がする。そのたびに校舎の外を睨みつけてやると彼らはまじめに「ぶあーぶあー」といつて僕らを掴もつとしたりするのだった。またたく、奴らは何をやつてこむのだろうか？ まじめに仕事をこなして欲しいものだな。

「…………ここ、変・・・・・」

「…………そうだね、変な連中がたくさんいる・・・・・」

僕は眼下に舞いている“影”に水をぶつける。野郎どもはこまだに下で僕らをあおつてこるように見える。

「…………いや、あの“影”のこともあるけど・・・・・時雨に感じる何かを感じる・・・・・気がする・・・・・」

「どういう意味？」

「…………時雨は確か、次期当主ではないといった気がする・・・・・」

「…………さうだよ？ それがどうかしたの？」

「…………この島に来て変わったことは・・・・・？」

僕のほつを搖ぎ無い瞳で覗き、僕はそんな彼女に

「ドキリ」としながらも考える。この島に来て変わったこと・・・・・？

「ああ、そういえば以前はほとんど“能力”が使えこなせなかつたのに楽に使えるけど？普段はあふれ出すエネルギー？に振り回されれるような感じがするんだけど・・・お箸を振り回すぐらい簡単だなあ・・・」

今まで気がつくこともなかつた新事実！

「・・・なるほど、やはり時雨は“器”・・・私が感じたことは間違いかつた・・・」

「・・・“器”？それって何？」

僕がそつ尋ねると彼女は呟くように答えた。

「・・・それは文字通り。この世界に広まつた“能力”を受け取る杯・・・皆、元から“器”的才能はある。まあ、“能力”を持つものはさつきも言つたとおり持つていないと使えないものだから・・・でも、世の中には“能力”という水が入つていない空の“器”がある・・・きつと、私の知るところでは時雨だけだらうね。」

「え？でも僕は普通に“能力”が使えるけど？」

それならちよつとおかしいことになるのではないのだろうか？

「・・・きっと、それは時雨の元からの“能力”じゃない。誰か、誰かが時雨に“能力”をあげたと思う。だけど、やっぱり他人の“能力”だから使いすぎると“器”にも影響がある。他人の靴を何日かはいてみればわかるけど、足がだんだんと痛くなつてくる・・・いずれ、その“能力”も使いすぎると“器”である時雨の体に何らかの影響を与えると思う・・・」

「そ、その何らかの影響つて具体的には何？」

「・・・それは・・・やつぱり、体が動かなくなるとか、押さえ出る“能力”を制御できなくなつて内から破裂するとか・・・そんなんじゃないかと思う・・・」

「す、推定！？そんな適当に言わないで欲しいんだけど！」

「ああ、さよなら、いづれ僕は内から破裂するのか？いやいや、意外と穴という穴から水が吹き出てそのまま逝つてしまふかも知れ

ない。

「…………あ～大丈夫だと思つ…………」

僕を慰めるようにしてよしよしと頭を撫でてくれる美羽さん。あの三人からは非常に恐れられていたのだが、本当は優しい人に違いない。

「ありがとう……根拠のない優しさはなんだか返つて傷つきそうなんだけど、僕は無表情な美羽さんに慰められたことを光榮に思うことにするよ」

「…………何だか素直に喜べない…………」

立ち上がって背伸びをする。そろそろ夕焼けがやつてくるだろう。現に、屋上に一人して立っている僕らを太陽は茜色に染め上げてくれている…………

「…………つて一・ちよつとまつた!これじゃ、校舎に戻れないんじやない?」

「…………まあ、確かに…………夜通しで探すのは“影”的数にもよるけど、今は無理そ…………時雨、あなたは今何が出来る…………?」

「そうたずねてくるのだが、この僕に出来ることは…………ないといつたほうがいいだろ?」

「…………“めん、思い浮かばないや…………」

「…………そう、それなら立ち入り禁止区域の詳しい場所とか知らない…………?」

その言葉になにやらかんじるところがあり、僕の記憶の細部までつめていく。

「…………あつた!思い出したよ!僕の部屋の隣に行つたらいけないつていわれている場所があつた!」

あまりのうれしさに僕はジャンプをしていた。

「…………それなら、そこに行くしかなさそうね…………」

「うん、そうだね…………でも、そこに行くときは私を連れて行って欲しいつて美奈さんが言ってたんだけど?」

その旨を伝えると、彼女は顔をしかめながらも決断を下した。

「・・・構わない。どうせ、食堂の前を通るのだから・・・」

「そう? それなら急ごうか?」

僕らは沈み行く太陽を見ることなく、校内へと戻り始めたのだった。

屋上から走ること、数分。僕らは一階の食堂へとたどり着いた。外にいたはずの“影”たちは何かを待っているかのように外で瞑想をしている。そもそも、時間だからだろうか?あの時話し合っていた“影”の一人組みは僕を見つけると手を振っていた。僕は美羽さんを見ながら隙を突いて手を振ったのだった。

「・・・美奈さん!」

「おや、なんでしょうか?」

にんじんを剥いている美奈さんはいつものように振り返った。

「・・・僕の部屋の隣に行きます!だから、ついてきてください」  
「・・・わかりました。ちょっと待つてくださいね これが終わったら向かいますので・・・」

彼女はにんじんの皮を丁寧に剥いて僕らの元へとやってくる。

「あの、他のお手伝いさんはいいんですか?」

「ええ、いいんですよ。私の代わりにきちんと職務(夕食)をこなしてくれるでしょう。プライベートではあまり付き合いなんてありませんが、とてもいい人たちですからね」

そういって走って僕らと一緒に食堂を抜けたのだった。食堂からは「あつ! 美奈! さぼるなつ! ! 何? 働かざるもの食うべからず? 」  
「ということで夕食をお願いします?」つてあんたがさぼつてるでしょ! 何なのよ、もうつ!」

とこうお叱りの言葉が飛んできたのだった。

僕は苦笑しながらも美奈さんと美羽さんとともに校舎の廊下を駆け抜けた。

## 第六話・過ちの消し方（後書き）

さてさて、なんだか暴れ始めてきているような雰囲気に終わりを告げてきそうなのこの状況・・・今のところ第九話ほどでこの話は終わると思われます。ちなみに、前書きで後輩のほうが言っていた「時雨の合体」は実際に考えていたことなのですが、文字通りSFになってしまったのでやめました。まあ、これからも新しい前書きシリーズを楽しんでください。

## 第七話・待つべき価値を持つ者（前書き）

「作者の頭の中の小説メーカー」「え、今日はこの作品の今後のことをについて……え？ あとがきでやれって？ わかりましたよ、ぶつぶつ……じゃ、今日は小説を読んでいる全ての人々に伝えたいことです」「わざわざと言いたまえ、助手」「わかつてますよ。え、皆さん、面白い小説があつたら自分の友達に薦めてみましょう。おつと、友達いなくて家族でもいいと思います」「ペツトは？」「ペツトが文字を認識できるほどの実力を持つてはいるのならOKです」

## 第七話・待つべき価値を持つ者

来る！来る！来る！

私の処へ奴が来る！

私は間違つていなかつた！

待つてゐる意味があつたのだ！

この桜の舞い散るこの場所で！

奴を待つてゐる価値があつたのだ！……

七、

よつやく地下へと向かうことが出来る階段を見つけた。既に夕日は半分ほどその姿を地平線に沈めており、それは同じようにして僕らの行動時間の終了を意味する。階段を駆け下りて広い廊下へと下りることが出来た。

地下へと向かう途中、僕らの目の前に剣治、焰華さん、ラストに壘さんが立っていた。皆僕らと田をあわさないようにして下を向いて力の入つてゐる感じは受けない。

「・・・・・」

「・・・・・」

「ねえ？何で無口なの？剣治？焰華さん？壘さん？もしかして、美羽さんの無口が移つたとか？いや、それなら僕のほうが先に移るよね？」

「・・・・時雨、離れろ・・・・」

近づけりとした僕と剣治たちの間に疾風の速さで美羽さんが現れる。

「どうしたの？」

「…………そいつら、あいつらが混じっている。しかも、代名詞立て続け

だ。  
「いくらなんでもそんな…………」

「…………信じないとこうのなら…………あの頭に書かれた文字を見ればわかる…………」

顔を下げていていた一人（焰華さん）に風をぶつける美羽さん。

「…………いまさら頭に“偽者”って書いている偽者はいないよね？」

「…………どうだらう…………？」

つづるな瞳とおでこは“偽者”といつ一文字。これは間違いなく、手抜きとしか思われない敵だらう…………やうはかとなく、同情を感じ得ない。

「でも、遊びで頭に“偽者”つつけたのかもよ？流行を追いかけているとかさ？」

「…………いや、流行じやないと思つ…………」

「まあ、当然ですね そんなことを流行と思つてているのは村雨様だけかもしれません」

冷たくあしらわれて僕はガクリときたのだが、そんなことを言つている場合ではない。

「じゃあさ、本物はどうしたのかな？あの“偽者”たちはこちに襲い掛かってくるそぶりもみせないよ？事実問題、静かに通れば気がつかないかも…………寝てるんじゃない？」

「…………いいや、そういうわけじゃない…………近づけばきっと襲い掛かってくる…………時雨、今あいつらを水で吹き飛ばす」と

とかできる…………」

「言われたとおりこやつてみるよー。」

右腕を地面上に吊りつかるのみとするべく、僕の右手の先から激流が

流れ始める。トイレのひねりをひねって出てくる水の量とは桁違いの量であり、この“能力”さえあればもし外でふとしたときに便利である。いや、そのふとしたことなど一度もなかつたが……

「ふつとべえ！」

三人めがけて激流を放つたのだが、僕の水は“偽者”である焰華さんの“能力”と相殺されてしまった。辺りに蒸気が立ち込める。「……黙黙だつみたいだよ。やれやれ、どうしたもんだろう？」

「？」

「……時雨のお手伝いさん、これ以外には道はないんですか……

「？」

そろそろ夕日も僕らにさよならと挨拶をして去つていってしまう。そうしたらもう大変。ここは僕らの部屋でもなんでもないただの校舎なので“影”たちは喜んで入つてきて僕らに襲い掛かるだろう。だが、これが虚構なフィクションなら「都合主義が……」「ないです……」

厳しい現実から逃げることなど、出来ないのかもしれない。僕らはそれを今知つた。

「……それなら、やはりこの人たちを倒すしか……」

「そうだね、“偽者”だから別に倒したって構わないよね？……くくく、剣治めえ、日ごろの行いをここでくい改めて懺悔するがいい……この前のお返しにボコボコにしてあげるよ

「おいおい、時雨君、心の声が前面に出てきてるよ？」

「！？」

振り返るとそこにいたのは剣治たち三人だった。

「あれ？なんでここにいるの？」

そうたずねると、焰華さんはさも当然といったばかりで僕に告げた。

「……ほら、考えてみなさいよ。夜になつたらあの黒い連中が中に入つてくるんでしょう？助かる方法は自分の部屋に戻ることだつたじゃない。この学校の地下へいく道はこの校舎の中だつたらここ

だけなのよ？来て当然だわ」

なにやら不機嫌そうなのを見るどどつかしたのだろうか？僕は笑つてゐる壘さんのほうを見る。

「ああ、そんなに心配そうな顔をしなくてもいいつすよ。焰華ちゃんは時雨君に申し訳ないと思いながらも謝れないだけつすよ。さつき、勘違いして時雨君を“偽者”扱いしてしまつたからつすね」

「そ、そうじやないわよ！あ、あんたこそ村雨君の班に行かなかつたじやない！」

食つて掛かつてゐる彼らだが、今この状況を冷静に受け止めて欲しい。今とでも、危険な状況のはずなのだ。だが、なんだろうか？この高校の休み時間のような喧騒は？

「・・・・・とりあえず、どうする・・・・・？」

美羽さんの一言を三人はきちんと聞いたのだろう。剣治は首をかしげながらも僕らに提案した。

「・・・・誰か一人が囮になつて・・・」

「囮になつて・・・どうするの？」

「残りが見捨てて地下に向かつて自室に向かうとかどうだい？」

「それじや、一人犠牲にならなきやいけないじやない！」

剣治の胸倉を掴んでそのまま宙に持ち上げる。すさまじい怪力だ。

・・・

「じょ、『冗談さ・・・あいつらは私たちの“偽者”だとするならば正攻法でいくしかあるまい？』

「どうじうじこと？」

しゃべる「」とに今の剣治にとつてはとても必要な酸素が彼から逃げていく。だが、そんなことにはお構いなしに焰華さんはさらに力を加えているようだつた。いや、ただ単に気がついていないだけなのかもしれないな・・・あ、ちなみに彼ら一人以外の僕たちはその現状をただただ傍観していただけだ。別に助けようとは思つていなわけではないが・・・

「・・・・私たち三人での“偽者”とかぬかす連中を倒せばいいだ

け・・・だ

「ああ、なるほどー」

いきなり解放された剣治は着地もつまく出来ないまま、地上へと墮ちてくる。

「ぐへー」とこいつと共に無様に倒れた剣治に壘さんが近寄る。

「・・・生徒会長つてのも地に墮ちたつすね 助けたくてもあれじや無理つす」

その顔がものすく喜んでいるように見える。

「君と一緒にしてもらいたくはないな・・・・・じや、時雨君たちは先に地下に行くとい。ああ、気にしなくて結構。私たちが“偽者”に負けることなんてないからな」

そういうてそれぞれが自分たちの“偽者”に踊りかかっていく。「さ、村雨様と風馬様・・・・彼らの犠牲を無駄にしないように地下へと向かいましょー!」

「え、やられること前提!ー?」

「・・・・戦いとは常に非情なものよ・・・・」

「え、何言つてるの!ー何?その悟りきつたよつな表情は?」

剣治たちが戦つてゐる“偽者”たちは美羽さんが言つたとおり、近づけば動き出したのだった。勿論、彼らが使つてゐる“能力”をそつくりそのまま使つて彼らと戦つてゐる。

僕らが移動できる範囲を残しながら戦つてゐる彼らの命聞をぬつて僕らは地下の階段へと飛び込むよにして地上から姿を消したのだった。

長くて広い廊下を駆ける途中、この島に来たときと回じよつな感じを再び受けた。

「・・・・時雨、どうかした・・・・?」

「ん~何か感じない?」

「・・・・何かって・・・・?」

「いや、言葉で言ひ表すのはちょっと・・・・」

僕の自室をとうとう越える・・・その瞬間に感じていた何かはさらに大きくなる。そして、それとは別の何かを感じた。

「・・・ねえ、何か来てない？」

「・・・御察しの通り、廊下の奥から何か来てますね・・・」  
美奈さんがそういうて立ち止まる。道案内の人気が止まれば後ろの僕らが立ち止まるのは当然のことなので・・・止まった。

「・・・何、あれ？」

ちょっと暗い地下の廊下を田を凝らしてみてみると・・・

「・・・時雨がたくさん・・・？」

いつも鏡で見ている

「自分」が沢山現れた。見事にその動きは統一されており、うつろな目に額にはご丁寧にも達筆で“偽者”と書かれていた。  
「ぼ、僕つていつの間に量産されてたの！？」

「さあ、どうでしようか？性能のいい機体はよく量産されるって聞きますからね・・・あの量産型の村雨様はどのよつの実力を持っているのでしょうか？顔がちょっとゆがんでいるようですが、オリジナルより弱いんでしょうか？それなら、虜めがいがありますね」

「・・・まあ、時雨なんて一人で充分・・・」

きつと、きつと二人はかつこつけてそんなことを言つているのだろうが、その量産型のオリジナルである僕は傷つきやすい“心”といふものを持つています・・・ぐすん・・・

「・・・村雨様に風馬様・・・ここは私に任せてくれ」  
そういうてどこから取り出したのか、モップを取り出した。

「・・・そんなものどこに持つていたんですか？」

「ふふ、それは秘密です・・・さ、私が道を作りますから死ぬ気で二階へと降りてくださいね」

表情一つ崩さず、彼女はモップを前に掲げると恐ろしいスピードで隊列をつくつていた偽者の僕に突撃を始める。

「・・・時雨つて弱い・・・」

その攻撃にあつさりと吹つ飛ばされてその場に倒れ行く僕の量産

型・・・そして、追い討ちをかけていく美羽さんの言葉・・・  
いいんだ、どうせ僕なんて根暗なんだ・・・・そう自虐しながら  
僕は駆け抜けた。

## 第七話・待つべき価値を持つ者（後書き）

さて、前書きで書いたとおり今後、この小説の方向性を伝えておきたいと思います。自分なりに考えているのは面白ければ何でもあり・・ではなく、面白いが、社会の常識を守ったもの（誰かを中傷したり軽はずみで重みのある言葉を使わないこと）を目指していくたいと思います。

## 第八話：“いた”は過去形今は違う（前書き）

（作者の中の小説メーカー）「あ～美奈ちゃん」・・・いえ、皆ちゃん  
あとがきでこの作品の存続に関わる質問をしたいとおもいます」  
「冗談じゃなくてマジです。本気とかいてマジと読みます」

## 第八話：“いた”は過去形今は違う

奴はたどり着いた

この場所へ

いや、正確には私のいる場所の前へ

私は求めていたのかも知れないが

今すべきことは唯一つ

……未来はわからないから面白いのだ。でも、ここで話に決着をつけよ。……

八、

美奈さんが僕の量産型を殴り飛ばしているいやーな音がここ今まで聞こえてくる。

「・・・・・今、泣き叫ぶ声が聞こえた・・・・・」

「・・・・・そうだね、それが美奈さんの声じゃなくて僕の声だというのは充分に理解できたよ・・・・でも、美奈さんに言われて地下一階に来たのはいいんだけどさあ・・・・」

僕らの目の前に広がっているのはたんなる大きな扉だ。しかし、どこかでこの扉を目撃したのだが・・・・夢で見た気がするのだが・

・・・・どうだったかなあ・・・・

「・・・・時雨、どうするの・・・・?」

美羽さんがそう聞いてくる。

「ん~何で?ここまで来たらあけるしかないんじゃない?」

「・・・・確かにそうだけど、場所はもうひとつあるはず・・・・」

「ああ、そういうえばそうだったんだっけ？でも、いまさら探し始めるのも面倒だし……」

僕は扉に手をかけた……。その手を美羽さんが掴む。僕は何故かぎょっとして彼女のほうを見る。

「……覚悟はいいの……？」

「な、何の覚悟？」

「……」

彼女は答えない。手を離さずに僕を見つめ続けるだけだ。

「僕は……」

「……」

「僕はここを開ける。なんだか思わせぶりな感じだけど、まだこれで終わりじゃないはずなんだ！」

勢いよく扉を押す……。だが、扉は開かずになってしまったまま。力を思い切りいれてもあかないのだ。これはどうしたのだらうか？

「……」

もしかして、もしかしていまだに手を掴んでいる美羽さんの力！

？嘘！全然力が伝わってないんだけど……

「み、美羽さん……」

「……何？やつぱりやめたくなつたの……？」

「そんなに扉を開けてもらいたくないの？」

「……開けてもらいたくないけど、開けたいんでしょ？私はそれを拒むことはしない……」

「じゃ、拒んでいいのに何であかないのだろうか？」

「……ああ、それはこれは手前に引く奴だとと思うけど……」

「？」

「……」

言われたとおりに手前に引くと、あっさりと開いた。僕はバツが悪いことこの上ない気分で中に入る。中には何もなく、ただただ、上が果てしなくコンクリートに囲まれながらも続いているといった感じだった。

「あれ？ 美羽さんは来ないの？」

「…………」めんね、今まで黙つてて……

「何を？ それよりどうかしたの？」

美羽さんは立ち上がりそのまま僕を追いこした瞬間……彼女は姿を消し、今までコンクリートだけだった部屋に変化が訪れた。

「…………」これは？

僕の目の前に広がったのは外でいまだに降り落ちてきている桜の花びらだ。

そして、気がつけば床は草が生えており、部屋の中央辺りだと思われていた場所には一本の大きな桜の木がどっしりとその存在感をアピールしていた。そして、中央辺りでどこかの踊りを踊っている一人の人間を見つける。先ほど消えた美羽さんだと思われるのだが……服は神社の神主さんが着るような感じの服だし、その手に握っているものはなんだろう？ 扇子にも見える。

「…………」

舞い散る桜の合間にぬうようにして僕はその人物に近づく。そうすると相手はこちらに気がついたのか、舞うのをやめて立ち止まる。なぜだか、懐かしい感じがして僕も立ち止まってしまった。

「いや、懐かしいんじゃない……この感じは……」

「」の感じはいつも、いつも……

彼女はこっちを向いた。その顔には夜叉の面がつけられている。

“能力”を……

彼女はその手で面を掴む。

“能力”を使うときに感じるものだ！

夜叉の面は外され、その下から驚くほど白くて整った女の子の顔が現れる。

「・・・・美雨・・・・」

その彼女の名前を春雨美雨はるさめみうといつ。

彼女は生まれながらにして“器”を持たずに“能力”だけを所持して生まれてきらしい。

当然、“能力”という水を受け止める杯である“器”という能力を持つていなかつたので彼女は“能力”が開花してきて数年で死んでしまうと宣告されていた。しかしあるとき、一人の男が彼女と同年代の息子を連れてやつてきた。男の血筋は“器”を多く排出してきた一族なのだが、元は水の“一族”だつたそうだ。だから、その少女を助けるために最善をつくした。

“能力”とはちょっととした拍子で相手に“移動”してしまつ。それは以前からよく言っていたことなので、男は自分の“器”を彼女に渡そうとしたのだった。

少々危険の伴うものだつたので彼らは孤島へとやつてきたのだ。成功の兆しが見えてきたのだが、彼のやるひとしたことはほとんど失敗に終わつた。

少女の能力はほとんど男に移動し、男と少女はそのあおりを受けてそれぞれが孤島の別の場所にその“能力”に縛られてしまつた。つまり、“能力”という水におぼれる感じになつたのだ。運よく、難を逃れることができた少年は水の“一族”に引き取られて当主にその“能力”を見つけられてそのまま“一族”の中のとある家族のところで育てられることとなつた。少年は拒絶することもなく、新しい家族を受け入れた。

元からあつたものを変えるのは大変なのが、なくなつてしまつたものを埋めるのは簡単なのである。

少年の記憶は消えていた。

だから、元からこの“一族”にいると感じていたのだった。そして、孤島に残されてしまつた少女は成長を継続し、自分なりにあふれ出す“能力”を制御することが出来るようになつたのだ。そして、“能力”を駆使して感情の乏しいながらも自分と同じ容姿をもつ少女を作り出した。既に所持していた“能力”は奪われるような形で時雨に行つてしまつてるので新たに“能力”を作り出したのだった。そして、作り出した自分の分身を風馬の元へと送り込んだのだった。自分の“能力”を所持している時雨を探すために・・・

「私のことを覚えてる?」

「だんだんと近づいてくる美雨・・・・僕は後ろに下がる。

「・・・・・」

近づいてくることに不思議はない。知り合いならば、知り合いならば・・・久しづり会えば近づいていくのが当然だ。それが、思い人ならば・・・

しかし、彼女は浮いている。そして、彼女は僕に会いたかったわけではなさそうなのだ・・・・

「時雨君、ベッドにいた私のところまでよく話に来てくれたよね?」思い出した、その記憶で確かに僕は彼女のベッドのところへやってきた。彼女が人間から“能力”の塊になつたあの日も・・・・さらに近づいてくる彼女からまた僕は一步、桜が舞い散る中を下がる。

「あの日もさあ、いつものように外に桜がふつてて・・・・来ちゃ駄

「田だつて言われたのに私が頼んだらあの日も来ててくれたよねえ？」  
僕は彼女が近づくよりも早く、後ろに下がつたつもりだったのだが  
・・・

「壁！？」

既に後ろには壁があつた。これ以上、後ろに下がることなど出来ないようだ。

「・・・待つてたんだ、ずっと」

愛おしそうに、僕に近づいてくる美雨。僕はそれを拒むことなどできず、ただただ、立ち尽くしていた。

「大丈夫、そんなに怖い顔をしないで？」

「何故？この展開なら間違いなく、僕を殺して連れて行くような感じだよね？」

そうたずねると彼女は悲しそうに頷いて僕に告げる。

「そうだよ、君から“能力”をもらつた後は当然、時雨君と一緒に消えようと思つてた。だけどさあ、私と時雨君が消えても消えない人物ができちやつたの。それが、美羽・・・彼女は見事、私の代わりに世界を見ててくれた・・・ちょっと血なまぐさいところも多かつたけどね。だけど、彼女を通して時雨君とも一緒に入れたからさ・・・私はもう、充分。だけど、元私の“能力”だつたものは時雨君に盗られたまま・・・だから、時雨君の体を蝕んでいるそれだけは私がもらうね？美羽のここでの記憶はもうなくなつていてると思うし、今の彼女の家にもう戻つてゐる。時雨君、暇なときに彼女に会つてあげて」

美雨はそつといつて僕の胸に手を当てるときかを手にとつてその姿をあつさりと消したのだった。だが、最後に彼女の声が聞こえた。

「・・・・じやあね、時雨君・・・・

それが直接僕に関係のないものだつたとしても彼女は僕を恨んでいた”のだ。

## 第八話：“いた”は過去形今は違う（後書き）

前書きで言つたとおり重大発表なのですが・・・この作品に漠然とした不安を感じた作者雨月は「この作品は本当にコメティーなのか？」という疑念を抱いたためにこれを否定するようなことだとえば「いえ、あなたが書いているこの小説は充分コメティーです」と言う人がいたら続けたいと思っています。なんとなく、わがままですが自身がないためにこのようになつてしましました！すいません！あ、ちなみにもしもこの作品が終わつてしまつたら一時期書いていた「消去天使クリア」を連載したいと思つていますが・・・どうなるかはまだわかりません。

## 第九話・写真は消えない／第一章　名のない章の終わり（前書き）

「作者の脳内小説メーカー」「え、初めに申しておきますが、存続が今のところ決定しています！皆さん、今後もよろしくお願いします！」「この章を終わらせたらコメディ要素をもつと多く入れたいと思います。」「評価と指摘してくださった”とも”さん、ありがとうございます！」

## 第九話・写真は消えない／第一章　名のない章の終わり

私なんか用かね？

……ああ、美雨がいなくなつたから今日は私に仕切つて欲しいのか  
？この生徒会長に？

……そこまで言ひなら……では、行こうか？

確かに、美雨は時雨の田の前から消えた

だが、それは彼の“田”に映らなくなつただけかもしれない

彼女が言ひように本当に消えたのかもしれない

既に時雨が立つてゐる島には彼以外に人はいない

全て、夢の中の出来事としてそれぞれが朝を迎えるだらう

しかし、彼にはまだ、この島に用事がある

……この島に美雨と同じく、縛られているだらう彼の本当の父親  
を探すために……

九、

「あ～月が綺麗だ」

僕は夜空を見上げていた。

今では無人島となつてしまつたこの島に一人でいるのだから……  
いや、僕がいるから無人島じゃないな……だが、僕以外の人物は

確かにいなかった。美雨が消えた時点での島に見て取れるほどの変化が訪れた。それは、桜の花が舞い散るよう普通なことで、消えていく建物を見てもおかしくも何とも自分が感じずに気がつけば桜の木が一本、生えている気の根元に僕一人が立っていた。

先ほどまで僕の前にいたはずの美雨という少女の姿もない。それに、校舎が消えたので剣治たちの姿を探してみたのだが、彼らの姿も当になかった。見えるとしたら桜の木が生えている丘の上から見えるものはもう一つ反対側の丘に生えているここに生えている桜の気よりも一回りほど大きな桜の木だけだろうか？あの大きな桜の木は何やらおかしく感じられる……なぜなら……

「まあ、世の中には光る竹はあったとしても光る桜の木はないよね？」

一人で呟きながら、涙の跡をぬぐいながら……僕は立ち上がってその大きな桜の木を目指して歩き出したのだった。何故、僕だけがこの場所に残ってしまったのかわからないのだが、先ほどの不思議少女美雨のせいだと思われる。もっとも、その不思議少女が姿を消してしまったのではや尋ねることが出来ないのだ。

星満点の夜空を一人で満喫しながら

「さて、こんな星空を見たのはいつが最後だったのかな？」と再び呟きながら僕はただひたすらに歩く。

「こっちの桜の木が美雨だったとしたら……過去にここで美雨の“能力”をどうにかする実験か何か知らないけどそれに巻き込まれたのは美雨に僕、そして……僕の父さんだろう……憶測だけど、あの桜の木は……」

いつの間にかゆっくりと歩いていたはずの僕の足は月に照らされた野原を駆けていた。バランスが崩れても、一度こけたとしても……途中バナナの皮を踏んでしまったとしても、僕は走った。

たどり着いたその桜の木は見事に輝いていた。

「父さん……」

「おいおい、桜の木に話しかけるちよつと危なそうな高校生だと思つたら俺の子供かよ……」

桜の木は光をさらりと放ち、田を離した隙にそれは人の姿にきちんとつになっていた。

「よお、何年ぶりだ？」

そこに現れたのは白衣を着てゐる男の人……「写真でしか見たことの無い僕の父親だつた。その人は写真の中と同じようにひげをそらすにそのままどことなくだらしない格好の人だつた。

「父さん……」

「さつきからそれしか言つてないぞ？ 美雨とあつたみたいだし……まあ、どうやら彼女も救われた……いや、それはいいや。ところで、どうした？ 田から塩分を含んでいりと思われる鼻水が流れているぞ？」

そうやつて小ばかにしたように笑う父さん。父さんを知る人は「ああ、あいつはよく人をからかつてたな……ああ、そういうや、とても適當な人物だつた」といつていた。

「おつと、無駄に力を消費した拳句に美雨が木じゃないからな……まあ、感動的再開をいまさらせんでも構わないだろ？ お前は男だ、泣くんじやないぞ？ それで、俺が見事に失敗した実験と思われていることについて何か聞きたいことは？」

一瞬だけ苦笑しながら父さんはそんなことを聞いてくる。

「……美雨は救われたの？」

「あ～それはまあ、救われたかどうかは知らん。あとはお前がどうにかしたいと思つたときにどうにかすればいいんじやないか？」

とても適當な答えが返つてきた。生前とちよつとも変わつていないのである。

「ど、どうすればいいの？」

「残念だが、俺は一つだけ質問を受け付けるといつたんだぞ？ 男に一言はねえ……ま、中途半端で時雨には迷惑をかけてるつて思つてゐるんだが……そろそろ時間がきたもんだからよお……」

父さんの田に涙はない。だが、その田が何かを必死にこらえていることを僕は知っている。

「…………しつかり生きりよ~あ~たまこは墓参りに来てくれよ  
? · · · · · ジヤ あなた · · · ·

そうこうして父さんはまるで霧が晴れるように消えていった。その顔は二ココともせず、僕をただただ、じつと見ているだけだった。

「さよなら · · ·

僕はそうこうして意識を失った。

「お~い、兄さん~」

ある晴れた月曜日 · · ·

「ふわ · · · · あ、蕾 · · · ·

僕の義妹である薔が僕を起しこせつてきた。

「ほり、姉さんも既に仕事に行つてゐるよ~」

どうやら僕の義姉さんもすでに仕事にこなつてゐるようだ · · ·

「おはよう、なんだかさあ · · · 薔の顔を見るの久しぶりなんだけ  
ど~まあ、改めてみると可愛い顔してゐるね · · ·

僕はほそつとして薔の顔を見る。

「 · · · · あ、え、な、何言つてゐるの~」

「はは、どうかしちゃったみたいだ……や、急いで学校行かない  
と遅刻なんだよね？」

僕はせつねと立ち上がりて部屋に薔薇を残してその場を去了た。

朝食は軽めのもの（ばなな）をとり首を軽く回して鞄を引つつか  
み玄関で待つてこる薔薇の元へと向かう。

「…………や、行こいつか？」

「うふ……じゃ、行つてきます、父さん」

奥の部屋においてある僕の“昔”の父さんが挨拶をする。

「……ねえ、兄さんは兄さんの父さんが行方不明のままがいい？」

登校中、薔薇はそんなことを尋ねてきた。

「うへん、ま、見つかっていないからねえ……今頃どつかで僕らを  
みて笑つてるよ。間違いなくね……」

僕はせつねで青空を眺める。そこには広がるのは星なんて見えない青空だ。そして、隣に立つてこるのは薔薇だ。

「ねえ、本当に今日の兄さんどうしたの？ ハッチな本を見すぎたと  
か？」

再び聞いてくる薔薇のねえにハッチをする。

「あこたつー」

「そんな感じじゃないよ、ちよつと変な夢を見ただけさ……」

「変な夢?」

「うそ……」

「おや、君もかい? 実は私もなんだ……」

やうにって僕の隣にいつの間にか立っている剣治に薔は驚きながら僕らは登校を続ける。ふざけたことを言つて笑いながら僕らは学校へと向かつ。

さて、家に帰つたら久しぶりに父さんの写真の近くを掃除でもしたまうがいいのかもしれない。そうしないと化けて出てきそうだから

## 第九話・写真は消えない／第一章　名のない章の終わり（後書き）

さて、前書きにも言ったとおりこの小説をコメティーで続けていきたいと思います。

## 第十話：“能力”と“器”の特別授業（前書き）

「作者の脳内小説メーカー」「今回はかねてより理解不能だつた”能力”を中心とした話です」「これでもわからない・・・という人がいたら教えていただけるともつと詳しく説明したいと思っていますので、遠慮せずに教えてくださいね」「ああ、先輩、俺、一つ質問があるんですけど・・・」「なんだ?」「小学校でならつた算数とかは使うのは計算するのに必要なのは知つてているんですけど、中学や高校で使う内容は社会人になつていつ使うんですか?」「・・・。そりや、あれだ・・自分の息子とかに教えるために習うんだよ!」「・・・ああ、なるほど・・・」

## 第十話：“能力”と“器”の特別授業

では、今日はこの世界について授業を行いたいと思います

・・質問がある人のみ、手をあげてください。あ、ちなみに手をあげる人が誰もいなければ一人一人点数を下げていきますのでそこそここれは自分でよく考えてくださいね。

はいっ、ではとてもいい返事が聞こえてきたようなので授業を続けていきたいと思います。

さあて、この中に授業が終わるまで点数が残っている人が何人いるでしょうかね

十、

間違いなく先生の執権乱用で始まつたこの生き残りをかけた謎の授業・・・先生と目が合つてしまつたら負けだ・・・先生と目があつたら・・・

二コリ

「・・・先生、質問があります！」

「はい、一番手は村雨時雨君ですね？どうぞ、質問してください

条件反射で手をあげたのはいいのだが、困ったことに何も考えていなかつた。な、何か頭の中に・・・いや、隅っこでもいいから適当に思いつくものを片つ端から言葉に乗せて先生に送ればこのばを凌ぐ事は可能に違いない。辺りの皆が無言のエールを送つてくれているのはわかるのだが、そのエールが

「お前と過ごした一年間・・・来年、下級生になつても俺たちは友

達だ・・・」といつエールではないホールなのが頭にくる・・・

「・・・そもそも、“能力”って何ですか？」

「いい質問ですね」

そういって先生はとても上手に一つのコップを描いた。

「・・・はい、まずは基本からいきたいと思いますが・・・歯さんはそれが所持している“能力”を使うことが出来ますね?」

まるで小学生低学年に聞くよつた感じで先生が聞いたためにあつとこつまに教室内は静かになってしまった。

「はい、出席番号十一番の君、先生に対してもん付けを決行したのでマイナス一点ですね 小さい点数だと思わないでください、まだ授業が始まつて五分も始まつていませんからね も、歯さん返事は?」

「――は――い――」

その返事に先生は満足してうんと頷くと黒板に描かれていのコップの右上辺りに夜間の絵をかいた。

「・・・それで、このやかんの中の水が皆がつかっている“能力”だと思ってください。あ、ちなみに“能力”は皆さんの体が成長していくことに小さいですが強さを増していくといわれていますよ。さて、このやかんの水をコップに注ぐと、どこまで注ぐことが出来ますか?」

僕に笑顔を見せながらたずねてくる先生(たぶん二十三歳ほど?)は

「さあ、点数を減らされたくないのなら答えてみなさい」とまちがいなく思つてゐるだらう。

「あ～そのコップのぎりぎりまで注ぐ」とが出来ると思います」

「そうですね、それであつてます・・・さて、このコップを君たちだとすると注がれている“能力”は個々で限界があるということです。酸素が地球が始まった当初、生物にとつて毒であったと同時にこの“能力”も我々にとつては毒だったのです。ですが、進化の過程で“能力”という液体を支えるためのコップとなる“器”が形成

されたのです。あ、ちなみに“器”は一般の人には見られないので、そんなに田を畠にしても君たちには見つけることが出来ないので馬鹿みたいに探さないで授業の邪魔をしないでくださいね。さて、“器”的説明をまとめるに、個々によってその大きさが違う…ということですね。この後に説明する“能力”についてでも補足説明をしますのでよく聞いておいてください。では、村雨時雨君が言つていた“能力”とは何か…先ほど比喩で液体といいましたが、このやかんの中の水を限界以上にコップに注ぐとどうなるでしょ…? 剣山剣治君、説明してください

「私はそのコップの材質のほうを聞きたいと思ひます!」

「…・はい、授業を邪魔するような質問はマイナス五点ですね。ちなみに、彼の質問に答えるにこのコップはチョークと黒板で形成されています。さて、このコップに限界以上の水を注ぐと当然のようにコップからあふれてこぼれてしましますね。こうなつてしまつた人もいると聞いています。こうなる確率は非常に低いのですが、なつてしまつととても危険です。まず、そうなる危険性をかきたいと思います」

そういうて元からかかれていたコップの隣にもう一つのコップを書く。それは小さいものだつた。

「…・生まれてきた中には元からこのようにコップ…・つまり“器”が小さい人もいます。もしもそれに注がれる水…・“能力”が限界点を超えてしまつとコップからこぼれてコップを覆つてしましますね? 先に告げておきますが、このコップは紙で作られたものだと仮定します。ずっと水につけられていたら当然、とけてしまいます。そうすれば能力は一気に解放されて、辺りに散らばつてしまします…・・・いずれ水…・“能力”は蒸発して消えてしまいますが…・・・ここで他の人コップを近くに持つてきます。そして、このようにひしゃくなどでその水を掬つてコップに入れるとどうなるでしょ…? このとき、近くに持つてきたほうのコップにはほとんど水が入つていないと仮定しましょ…・・・さて、どうなるでしょ

うか？村雨時雨君、答えてください」

「えへっと、こぼれてしまつた水が他人のコップの限界点まで入るということですか？」

「はい、その通りですね。そうすれば、紙コップもずっと濡れることがなく、長生きすることが出来るでしょうね。ですが、この方法は間違つたら受けて側の紙コップも同じように濡れて双方駄目になる可能性があるので気をつけましょー！」

そういうて親指をなぜだか僕にぐつと突きつける先生だった。

「さて、ここから確信的な説明をしていきたいと思います。まず、一人の人間がこの状態に陥つてさらに、失敗してしまいます。そうすると、その人間は壊れてしまいそうだが、まだ形を保つている紙コップという状態を形成します。さて、そのよれよれの紙コップに何らかの刺激を与えるとどうなるでしょうか？見事にその紙コップは崩れて中に入つていた水はこぼれてしまいます。ここで実際のところは終わりなのですが、世の中には色々と面白いことがあります。ここでこのぼろぼろになつたコップを隣にある丈夫なコップに入れるとどうなるでしょう？ああ、ちなみにこのコップは特別製のもので水では濡れても壊れないということにしておきます。まだこのコップには要領がありますので、当然、紙コップはこの大きなコップの中でもろぼろながらもその形を保つことが出来ます。これを先ほどの人間に置き換えるとぼろぼろになつてしまつた人間でも誰か、自分と“能力”を受け入れるほどの“器”を持つ人がいれば助かるということになりますね。受け入れる側のメリットとして自分と違う“能力”の人ならばその人の“能力”を使うことが出来ますし、同じ“能力”ならばより強力な“能力”を使うことが出来ます。え？何故かって？それは $1+1$ を足すと $2$ になるのと同じことですよ。ああ、言い忘れていましたが飽和の状態から紙コップの形を形成している間の状態を私たちは“能力の固まり”と呼んでいます。この状態ならば人とも話せますし、その人物も自ら刺激を与えない限りは半永久的にその場にいることができます。まあ、お化けって言つ

ても間違いではないと思います。それと、中には近くに生えている桜の木に意思が移つて化け桜と呼ばれるものも世界にあるそうですよ」

そういうて先生は黒板に書かれていたものを消していった。

「さ、他に何か質問はありませんか？」

生徒を踏みするような視線を送つて今度は何を求めるのだろうか？

「せんせー質問いいですか？」

一人の女子生徒が先生に尋ねる。

「はい、剣山亞末さん。何でしよう？」

「せんせーは時雨君の質問を受けたときに“能力”は小さいが成長していくつて言つていたんですけど・・・それなりにそれ私たちは全員“能力”があふれてしまうんじゃないんですか？」

その指摘に先生は方眉を上げながらもせきをして亞末さんのほうを見る。ちなみに亞末さんは剣治の親戚との話である。詳しい紹介は今度したいなあ

「はい、どうやらこれは私の説明ミスのようですね。“能力”が成長するようにきちんと“器”も若干“能力”よりも大きく成長します。よつて、基本的に“能力”があふれ出すようなことはありません。中には他人の“能力”を移しているという人でも、移す前の人の“器”を少しでも持つているのなら心配しなくて結構です。さて、どうやらそろそろ授業を終了させてしまつチャイムが絶妙なタイミングで鳴りそうなので、今日の授業はこじらで終わりにしようと思いますが・・・どうしましょうか？」

先生がそう尋ねるとひとりの生徒が手をあげた。

「その意見には賛成です！」

「はい、君は剣治君と同じようにマイナス5点×2ですね～」

「え！？私がいつ先生の気に触るようなことをしました？」

先生が言つたとおりに「で・・・

## キーイングーンカーンゴーン

絶妙なタイミングでチャイムが教室へと鳴り響いた。

「さて、最後に言い残しておきますがまたなにかわからないことがあつたら聞いてくださいね？先生は場所、時、場の空気を読まずに現れる生徒の味方です。言つてくれれば詳しく説明してあげますからね」

そうやつて先生は去つていった。残された生徒は

「ようやく嵐が消えた。よかつたよかつた」と顔にかかるれている。無論、僕もその中の一人だ。

「いや、本当に今回の授業は皆を貶めようとしている教師側の魂胆なのではないか？」

剣治はとても難しい顔をしながら僕にそんなことを尋ねてくるが、そんなことを僕が知つて立場でもないのだ。知るはずがない。

「時雨君、しかしそあ・・・・君があんなことを聞かなければ私は点数を減点されることなどなかつたのだよ？わかっているのかね？」  
「その責任転嫁はどうかと思うけど・・・・」

メガネを意味もなく光らせながら近づいてくる剣治を脇にどかしながらこれからどうしたものだらうかと思いながらも思考をめぐらせる。

「ああ、そういえば今日は生徒会の雑用係が休みだつたな・・・時雨君、ぜひとも生徒会に来て一緒に仕事をしてくれないかい？」

剣治が態度をこりつと変えてそうたずねてくる。

「いや、どう見ても一緒じゃなくて僕だけじゃない？その仕事・・・

「気のせいだ・・・彼女もいないし部活も入つていないやつを雑用に使つて何が悪いんだ・・・おつと、今のは気の迷いだからな。決して本心が出たというわけではない」

さわやかに笑つて僕に返事を待つていつのうだつたのだが、僕は

同じように笑いながら彼に水鉄砲（僕が得意としている技）を浴びせてグッバイ！

「さ、これからどうなるんだろうねえ・・・」

後ろから追いかけている剣治をどのよひにまじつか考えている放課後だった。

## 第十話：“能力”と“器”の特別授業（後書き）

どうだったでしょうか？これでおおかたのこの世界のことについて少しは理解いただけたと思うのですが・・・まあ、このままでは自己満足で終わってしまう可能性がありますので、わからない人がいたら教えてください。そのときはまた、名前の決まっていない先生を自己紹介と共に再び登場させて説明してもらいつことにしますので、よろしくお願ひしますね。

## 第十一話・カイコウ

世の中とこゝもの運命とこゝものがあるかも知れない。

いや、意外とないのかも・・・・・

今田も私は私宛の手紙・・・・・“風馬家”的手紙を手に取る。

わて、今日ほどのよつたな相手に争ひのむなしさを教えればいいのだらう。

戦いといえば、この前おかしな夢を見た。

普段は一人で戦う私の隣にそのときは誰かが立っていた気が・・・

……私宛の手紙の中身は“水の一族の偵察”だった……

十一、

世の中とこゝものはわからないものである。僕は今、“一族”的最高権力者である長老様のもとへと連れてこられた。

「村雨時雨、村雨薈をつれできました」

「うむ、」<sup>ハサウエ</sup>「勞・・・・」

「・・・・・」

隣に立っているのは僕の義妹と僕らに連絡をしてここまで車で送つてくれた人がよさそで誰からも利用されそうな男性だった。

「じゃ、一人とも・・・・おじさんは門のとこりで待つててるから・・・

」

そそくさと逃げるよつとして僕らの前から姿を消すおじさん。その姿がまさしく

「この長老のところにいるといふことはない」と語っている。事実、この長老さんの尊は非常に黒いものとなつてゐる。気に食わなければその相手がどのようなものであつても“一族”的名簿から消されているとの噂なのだ。挨拶の声が小さいだけでも島流しにあつた人もいる。ここは慎重に行かなくては、僕と義妹の行く末はよろしくないのかもしない。

「兄さん、私たちどうなつちゃうのかな?」

そうやつて小声で僕に話しかけてくる義妹……不安なのだろうか?顔が真つ青だ。

村雨薺……水を操る“一族”的一つ、村雨家の次女として生まれた女の子である。

小さい頃はよく色々としたものだなあ、おしめかえたり、おねしょをした後の布団の始末と変わり身……あのとき、怒られたのは僕なんだけどなあ……そこで、今は高校二年生である僕より一つ年下。家族としては僕が兄貴でもう一人、姉さんがいる。好きな物は甘いものと体を動かすもので嫌いなものは苦いものと怖いものだ。幼い顔立ちと体つきで実年齢よりも下に見られてしまうことがあるのでそこをコンプレックスとしているらしい。詳しく聞いたことがないからわからんが……剣治曰く

「ああ、薺ちゃん?まあ、時雨君の義妹にはちょうどいいんじゃない?あ、彼女にしたいかつて?そりやないね私は心に決めた人がいるんだ。残念ながらおままでとの相手は遠慮しておくれよ」とのなんだか非常に腹立たしくも的確な指示を得てゐる。

「薺よ、そろそろ“一族”を束ねる当主としての自覚を持つてきか?」

いきなり話し始めた田の前のおじいさん。何故か知らないが右目に眼帯をしているところを見ると非常におそろしい雰囲気をかもち出してくれてゐる。

「あ、は、はいっ！」

「自信はあるか？」

「な、ないですけど・・・兄さんとかに手伝つてもうつて顔をまとめていきたいと思つてます！」

隣に立つ僕としては

「え、マジー？ そんなのいつ決めたっけ？」と思つたのだが、ここでそんなことを言つたらいいことなさそうだ。

「ほお、兄貴を頼りにしてこと？」

白々しさうにそんなことを言つて始める長老・・・さて、この人は何歳なのだろうか？

「ええ、頼りにします！ どんなときでも助けてくれるに違ひありません！」

力説してそんなことを言つてこいるのだが、僕としては実力以上のことをするのは出来ないと思つただが・・・ そのとくにせぬがりでしううか？ 薔さん？

薔は非常に顔を赤くしながらもがんばつてこいる・・・いや、お兄ちゃんとしてはそこまで言われると引にじつてもひけないとこりが・・・ もう、こいつなつたらひくんじやなくて押したほうがいいのか？

「ふうむ、時雨は構わんと思つてこいるのか？」

「え、あ・・・」

「彼女が出来たとしても妹のお守り・・・お前に出来るのか？」

「あ～がんばります」

ここは曖昧に答えて自分の首をつなげておいたほうがよさそうだ。

「そいつが、それなら構わんが・・・ 今回、薔に時雨を呼んだのは他でもない、お前たちは“風馬家”を知つてこいるか？」

どこかで聞いた名前だな・・・ どこだつたかな？

「時雨は知らんかもしけないが、薔は答えられるだろつ？」

「はい、ええと、争いを起こしたら報酬をどこからかもうつて争いを止めるつて人たちですよね？ どこの“一族”にも属してないけど、もとは“風を使う一族”だと聞いてますけど？ 戦つて残つた人たち

はいないとか・・・・それがどうかしたんですか？」

知らないことに越したことはないような内容だ・・・なんて危ない人たちなんだ？

「どうやら、その“風馬家”に田をつけられたらしく」

「誰がですか？」

薔がそんなのんきなことを言つていて。そして、僕は冷や汗が流れ始めているのを感じている。

「・・・お前たちだ・・・」

「ほら来た！・・・・あ、いえ・・・なんでもありません」

非常に恥ずかしい思いをしながら、下を向いて反省のポーズ。

「・・・・あの、それでなんで狙われているんですか？」

「さあな・・・まあ、襲われる可能性があるのはお前たちが登校中か、下校中・・・両方とも部活にはいつていなうそつだが・・・」  
そこで一旦話をきつてため息をつく。ああ、そういえば僕らの“一族”とかには目の前の前のおじいさんみたいな人を守るために“ぼでい”が“ど”がいるんだつた。もしかしたら僕らを助けてくれるのかも！

淡い期待と共におじいさんの一言を待つていて

「はあ・・・悪いがお前たち二人に護衛をつけることが出来ないんだ」

淡い期待はやはり、淡い期待でがつぐつとうなだれる僕の姿を誰かが見たら

「リストラされたサラリーマンみたいだ」とこくに違いないだろう。「まあ、次期当主とその兄貴だ・・・なんとかなるだろ。お前たちの家族には既に伝えてあるから、家に帰つてたずねてみるとよい」

「そういつて僕らに

「気を張り詰めてがんばるよう」「元気で」とつただけで僕らは退出するよつて言われたのだった。

「ねえ、どうじよつが？」

「どうするも何も……」

長い長い日本庭園を歩きながら一人で今後の予定を話し合つたのだが、どうなるものでもないのだ。

「しかしまあ、変なのに目をつけられたつてことだよね？」

「ある意味、ストーカーよりたちが悪い相手だよ……薔、なんとかなるつて思うかい？」

「うーん、襲われるとしたら……」

さて、僕と薔、どっちが襲われる可能性が高いだろ？僕ら二人は結局答えを見つけることが出来ないまま、その日は静かに終つてしまつたのだった。

次の日、いつものように学校に行くと男子たちが騒がしかつた。いや、クラス全体がうるさいものだった。

「ねえ、どうかしたの？」

「ああ、時雨君か……実は今日、このクラスに転校生がやつてくるそうだ……昨日、校長先生から教えられてね……麗しの美少女だとの目撃情報があるんだ」

「へえ、それはすごいね……まあ、だから男子たちがはやし立ててるのかな？ だけど、僕らのクラスの男子はそろつて彼女がいるだろ？」

そうたずねてみると、剣治はうんと頷いて……

「それだけじゃないんだよ。その転校してくる美少女がものすごい強いそなんだ。一度手合わせ願いたいと思つて、連中が二〇人ほど多いからだろ？ うね……どうだい、時雨君も一度相手と手合わせしてみたら？」

「いや、僕は遠慮させてもらつておくれ。興味ないし……それより、この前借りてた本だけど……途中、破れてたよ？」

その後、僕らは他愛のない話をして時間を過ごし、朝のHRとなつて皆が静かに机につくと、数分遅れで先生がやってきた。

「はーい、皆！ 元気？」

「・・・・・

いつものようにやつてきた若手の先生に誰も無反応・・・・・  
「むう、皆つれないなあ・・・・そんなことじや先生、怒つちやうござ

「

「・・・・・ふつ、年考えろつての」

「人の生徒が先生の[冗談ではない]一言を笑つてしまつた。

どがーん

「人の生徒（先ほど笑つた人物）は足元からの爆発を受けて天井  
にのめりこんだ。

「あらり・・・・ちょっと力加減を間違えちゃつた てへつ

ちなみに、その後に続く言葉は

「天井どころか、屋上まで突き破りうつと考へたんだけどね」に違  
いないだろう。

さて、一人犠牲者が出てしまつたのだが・・・まあ、それはいい  
や。

「先生、転校生はどうしたんですか？」

「あ～そうだつた。今日やつてきた転校生はとつても可愛い美少女  
よ 目をきらきらさせながら見てあげてね」

おいおい、この先生はどういう先生なのだろうか？まあ、この学  
校に集まつてきている連中もどこか頭の変わつたところが多いから  
なあ・・・・僕としてはその中にいて勉学に励んでいるのだが、こ  
のクラスは比較的まともなほうでよかつたよかつた。

「じゃ、入つてきてね～」

扉を開けて一人の少女がやつてきた。僕と剣治は同時に息を呑ん  
で呴ぐ。

「・・・・・か、風馬・・・・美羽・・・・！？」

「・・・・・目標、確認・・・・」

彼女の瞳はとても冷たい（絶対零度？）輝きを放つていた。

外では誰かの声が聞こえたような気がした。

## 第十一話・彼女のやり方

世の中って言つのは自分の思い通りに行かない

そんなことは百も承知・・・

予報とは予想して報告すること・・・

だから、天気予報が外れても文句を言つてはいけないのである

だけど、予測できるのは天気だけなんだろうか？

・・・人が人と出会うということは予測できないのだろうか？

十一、

ものすごく冷たいオーラを纏つた転校生、風馬美羽は昼休みとなつた今でも辺りに人を近寄らせることなく、やたらと僕のほうを見つけているのだ。しかも、ばれないよう努めているのだろう。これが普通の転校生で美少女、さらに僕のことをちらちら見ているというのなら

「どうしたの？」と僕は彼女にお近づきするだろうが・・・近づくものはすべて冷風ではねかえすぞという意味を持つた視線に誰も近づきたがつたりしないだろう。根性を持った男子生徒たちはまるで蛇の王様であるバジリスクに睨まれたアマガエルと化していた。おせつかいな女子たちも黙つたままなので進展が無い。

唯一、彼女に普通に接しているのは先生ぐらいなものであり、先生はもとからそういう凶太い性格なのだろうと噂されていた。

「剣治、彼女に話しかけないの？」

その先生とためを張ることができるのはこの男ぐらいなのだらうが、彼も珍しく動かなかつた。

「ああ、面倒だから・・・」

「面倒！？」

「正直、あの風馬家を敵にするのは一族としては反対だと先ほどメールがきたんだよ。下手にちよつかいを出して一族を滅ぼすんじやないぞといわれてしまつた」

そういえば先ほど剣治が彼女のもとへとこうとして携帯が鳴り出したつけるなあ？じや、このままでは彼女はこのクラスで孤立してしまうのではないのだろうか？ううむ、可哀想だなあ・・・と思いつながらも動けないでいる自分を情けなく感じたのだが・・・

「・・・・時雨・・・・」

「？」

誰かが僕の名前を読んだ気がしたので剣治のほうを見ると首をふり、僕らよりも離れた場所で首をすくめて隠れるようにして身を寄せ合っている男子たちに視線を向けると首を振つた。残りは美羽さんだけとなる。

「え、え～つと・・・・」

「・・・・時雨・・・・」

気がつけば目の前に立つてゐる美羽さん・・・・この人が忍者だつたらそれはもう、名に残るような忍者になつていたに違ひない。

「あ、な、何でしょう？」

「・・・・誰かに校内を案内してもらひて先生に言われた・・・・

「え、ええと？」

助けを求めて剣治を見る。彼は死んだふりをしていた。

「う、ううんと・・・・？」

今度は他の男子生徒に助けを求めてみたのだが・・・・

「う・・・・ど、毒を盛つていただと？」

「ブルータス、お前もか・・・・」

「我が一生に一片の悔い無し！」

「ば、ばか・・・な・・・」

「戦いの中で戦いを忘れた！」

とそんなことを言いながらたばたと倒れていく。裏切り者と白状者たちの死屍累々とした場所が出来上がってしまったのだ。

「・・・わ、わかつたよ・・・」

僕は引きつりながらも微笑んで彼女と一緒に廊下に出たのだった。途中、廊下ですれ違った腕に確かな自身のある不良生徒たちも見事に死んだ真似をしている。彼女を熊か何かと勘違いしているのではないのだろうか？熊だつたら死んだまねをしても意味がない。ちつ、普段はでかい面してる癖して結局それかよ！？無謀とわかつていながら突貫していく勇気があるものがこの学校にはいないのか？

「えっとね、ここが音楽室・・・」

不良のたまり場の一つである音楽室・・・」では不良たちが常に占拠して「コンクールに出てもいいのではないかといふぐらいうまくピアノを弾いている。

演奏中にはいると

「集中がきれるだらうが！」と相手が先生だらうとお構いなく切れる悪の中の悪？が揃つている場所もある。ここなら、突貫してくれる相手もいるに違いないと思つたのだが・・・

「だれだ？」ちちや「ちちやと・・・この小娘か？」

美羽さんに手を出そうとした不良のその手が体ごとそのまま飛んでいつてしまつた。そして、そのままピアノを占領すると勝手に弾き始める。

演奏中

「？」

演奏が終了して（とばされていなかつた不良たちは借りてきたねこのようだった）僕のほうに視線を向ける。

「・・・えと、何の曲？僕、知らないんだけど・・・」

話に合わせただけである。僕は曲に疎い

「・・・即興で弾いた。あえて題名をつけるなら“出会いに喜びを

”  
•  
•  
•  
└

「そ、 そ、 う、 な、 ん、 だ、 。

• • • • • • •

弾まない会話に美羽さんの冷たい視線に加えて辺りの同情の視線（かわいそうに、寿命が縮まつてゐるぜ、あの顔・・という声が聞こえてくる）に顔に張り付いた恐怖を何とかはがしながら僕は彼女に継げた。

「屋上に行こう！」

•  
•  
•  
•

「ま、また今度きちんと案内するから・・・・・ね?」

「・・・わかつた・・・」

一人して屋上の扉を開けると強い風が僕らに吹きつけてきた。

「 い い 風 」

彼女は屋上に出て体で風を感じていったよ。いつだ。

「そうだね

一  
一  
一  
一  
一

強風なのでグラウンドで女子たちがスカートをあきえているところに外で感じながら

を凝視しているだけである。

「・・・・・ 気が変わった・・・・・」

何の？

「・・・私はあなたを見たことがある・・・気がする」

「奇遇だねえ　・・・・僕もなんだ」

• • • • •

卷之三

「夢の中なんだけどね・・・」

「なるほど、私も・・・」

二人して首を傾げるしかないのでは、どうしたもんだろうかと思つたのだった。しかし、首をかしげている時間も短かった。

「ふふ・・・・」

「はは・・・・」

おかしくないのにお互いに笑い始めたのだった。

なんだか・・・・なんだか非常にいい雰囲気じゃないか?女子とこんなに会話が進むなんて、妹以外で初めてではなからうか? よ、よし・・・・・」こは勇気を振り絞つて話をもつと続けることにしよう。

「ねえ、美羽さんって夢、ある?」

「夢?」

「うん、夢。ああ、夜見ている間に見るものじゃないよ?田標とか、そんなの」

「・・・・・いや、ないけど・・・時雨はあるの?」

「うん、あるよ?僕はね、悪の組織を立ち上げて人類の敵になることなんだ」

「・・・・・」

「ばかだよねえっていわれるんだけどさ、いや、自分でも馬鹿だつて思つてるよ?まじめに考えている奴なんて一人もいないだろ?に・・・・おかしいよね?だけどさあ、僕は理由なんていいから、一度決めたことをやりとおしてみたいと思うんだ。変だつて構わない」  
「・・・・・変。十分、変・・・・けど、時雨がそういうのなら、私が・・・・何とかしてあげる」

「え?」

聞き返そうとしたところで強風がいきなり吹きつけてきた。面食らった僕はふらつとして、美羽さんから掴まれる・・・・と、必要以上に相手が力をこめて僕を引っ張つたので僕は彼女のほうに体重を掛けてしまった。

「んぐ!-?」

何が起こったのかわからない僕だったが……美羽さんは笑っていた。

「……人類の敵になるのもいいけど……世界の救世主になつてはくれない？」

「え？」

何を相手が言い出したのか僕にはわからなかつたのだが……相手、美羽さんは真剣な表情をしていた。

「せつかく、友達になれたと思ったんだけど……私の友達なら、救つてくれる。必ず。だから、また会いましょう？」

「…………？」

彼女は強風を一気に体に纏つた。空でも飛ぶのだろうかと僕は思つたのだが……なんと、気がつけば浮いているのは僕のほうだつたのだ。そして、だんだんと地上が遠くになつていいくにつれ、普通の人だつたら

「おろせえ！」とか叫ぶのだろうが……

「うはっ……」

あいにく、僕は高所恐怖症だったために見事に気絶。その後、自分がどこに行つたのかわからなかつた。

「……任務、失敗。だけどまあ、私も彼を追いかける……」

美羽は教室からくすねてきたチョークを使って屋上に書き残したのだった。

時雨はビートにいったのだろうか？行方不明となつた彼に対し、周りは

「とつとう奴は悪の組織を立ち上げるために資金を求めていたのか？」と半ば本当に考えられたのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8824c/>

---

人類の・・・・～僕のやり方～

2010年10月8日15時50分発行